

【座談会】

明治学院大学国際学部創立30周年記念座談会
「国際学部30年の歴史を振り返る」

勝俣 誠・加藤 典洋・高橋 源一郎・原 武史・武者小路 公秀



(2016年7月26日 明治学院大学白金キャンパス・国際学部共同研究室にて開催
写真は向かって左から勝俣・武者小路・高橋・加藤・原)

高橋 今日は皆さん集まっていたかまして、ありがとうございます。明治学院大学国際学部創立30周年記念の座談会を開催させていただきます。司会は研究所所長の高橋が行ないます。よろしくをお願いします。

今回は、武者小路先生、加藤先生、原先生、勝俣先生、4名の元教員の方々をお招きしました。現役は僕だけということなので、忌憚なくお話しいただけると幸いです(笑)。20周年の時には記念のイベントは行なったのですが、記念号は特に出さなかったそうですね。

加藤 これは『国際学研究』の記念号？

高橋 はい、そうです。ふだん通りに研究発表もあるのですが、30周年ということで、振り返るにはちょうどいい時期だろうということで

す。正直申し上げて現役だとなかなか言いにくいこともあるかということ(笑)、元教員で、同時に創立時からいらっしゃる方を中心にということですが、勝俣さんは？

勝俣 加藤さんのほうが先輩です。僕は1988年です。僕はカナダの大学の教員だったのですが、創立時には一応行くことが決まっていた。実際の着任時にはすでに加藤先生がいらっしゃいました。

高橋 86年に国際学部は始まっていますね。

加藤 一番先は武者小路さんだと思う。というのは、85年にもう準備会みたいなものが始まって、武者小路さんはそこにおられたでしょう？

武者小路 はい。84年ごろから。

高橋 今日は、まず最初に国際学部創立以前の話

を武者小路先生を中心にお聞きして、それから創立時の話、あとから加わったのが僕と原さんなので、それぞれの皆さんの明治学院大学国際学部での体験と感想を中心にお聞きして、最後に、30年後のいま国際学部が置かれている立場——これはうちの学部だけではなくて日本の大学が置かれている立場でもあると思うので、これから一体大学というのはどうしていったらいいんだろうというようなことが考えられればいいかなと思っています。よろしくお祈りします。

僕がこの学部に来たのは 2005 年です。今年で 12 年目になるんですね。6 年やって 2011 年にサバティカルをいただいて、それから 4 年目です。僕もあと 2 年少しすると「元教員」になるわけですが、非常に面白い経験をさせていただきました。僕の感想も後で少しお話ししますが、まず最初に武者小路先生にお聞きします。明治学院大学国際学部は 1986 年に創立されるのですが、その前の段階、準備期間があったということは聞いていますし幾つか資料も残っているのですが、武者小路先生は、この準備には、どういうふうにかかわられたんでしょうか。

武者小路 実は、84 年ごろだと思いますが、私は国連大学の、人間と社会開発・発展プログラム担当の副学長だったのですが、青山にいまは立派な建物が建っていますが国連大学がまだできる前で、あの近くの東邦生命ビル（現渋谷クロスタワー）の 8 階と 9 階に国連大学がありまして、そこに森井さんが来てくださったんです。

高橋 森井さんというのは？

武者小路 森井眞さんという明治学院大学学長で、フランス史の研究を専門にしておられた先生です。森井先生はストラスブールで神学の研究もされていた方で、面識がなかったけれども、お名前を存じ上げていました。私はローマ・カトリック教会の信徒ですが、1957 年頃フランスでポール・リキュール先生に出会い、フランス・カルヴィニズムの思想に共鳴を感じていたところで、その本場で研究しておられた森井先生が、明治学院大学のキリスト教主義の大学に国際学部をつくる構想に感じ入りました。国連大学副学長になる前に、

カトリックの上智大学に国際関係研究所をつくるお手伝いをしたこともあって、今度は宗教改革を経過したキリスト教の大学のお手伝いができることは、私にとっても、国連大学に参加した国際学術交流強化の流れで、大変ありがたいご縁だと思います、お引き受けしました。

高橋 当時の学長ですか。

加藤 88～89 年に日本社会が一斉に昭和天皇について自粛した時、キリスト教系の大学でそれに対する抗議の声明みたいなものをして、その時に中心でやられた学長の先生。

高橋 森井眞さんがいらしたわけですね。

武者小路 はい。実はその時まで森井さんを存じ上げていませんでしたが、国連大学に 76 年から勤めていましたけれども、68 年から 70 年ごろは、カトリックとプロテスタントと一緒にやっている、石鹸会社みたいな名前なんですけど、SODEPAX——Society, Development and Peace という、開発の問題を中心に研究し、いろいろなプロジェクトにバチカンと世界教会協議会で金を出すという委員会があって、そこの平和学のアドバイザーとして勤めたこともありまして日本のキリスト系の方たちといろいろ付き合いがありました。そこで要するに新しい学部をつくりたい、その新しい学部は平和研究の研究所も併設をして平和を中心とした国際的な学問をやろう、と。私は国連大学に勤める前にそういうキリスト教関係の運動をして、それとあわせて上智大学の国際関係研究所をつくっていたので、それでお呼びがかかりました。これからはそういう国際関係研究所ではない、もっと問題意識のある研究、平和研究もやるし、教育もその意味で国際——その時は「国際学」という言葉はまだなくて、実を言うと私は、国際関係というのはいいですけども、やっぱりアメリカ的な伝統で、何もそういう必要はないということをお初めから申し上げて、それで国際関係学部ではなく国際学部をつくることでお手伝いすることにしました。国際学部という「国際学」の学部をつくる構想に強く引き付けられました。国際関係はアメリカにできた、それなりに「人間関係」をもとにした平和な国際関係を目指す学問で、特に

政策科学という側面を強調した学問です。しかし、国連大学で当時、グローバル危機のもとでは、政策科学では危機的な現実の批判主義的な分析が不足していることを痛いほど知らされていたので、「国際学」というもっと総合的で学際的な学問をする学部の構想に、そういうプロテストする思想性の学部をつくらうという心意気に感動しました。

高橋 最初、森井先生が提示したのは、国際関係学部みたいな名前だったんですか。

武者小路 いえ、そうではなくて、国際関係論とは違う国際学を中心にした学部をつくるというお話でした。

それで、いろいろなことがありますけれども要約して申しますと、いろいろ話しあった中で私は、国連大学で私が経験したことをもとにして、国際学というものはいろいろな学問分野、たとえば社会科学だけではなくて人文科学も入れないと本当の国際的なことはわからないから文化的な側面が一つ大事です。それからもう一つ、実は国際学部をつくる明学の方針に私が悪い影響を初めから与えたのですが、学習院大学で教え始めて、法学というのが解釈法学で本当にくだらないと言っただけは悪いですが（笑）、法学を中心にして国際の問題、政治経済の問題を扱うということは、やるべきでないと考えていました。それは、法学そのものの問題ではなく、今日まで日本の主流になってきた形式的な解釈法学的な国際学になっても困るので、だから法学ももちろん必要だけれども、法学は制度論的な批判主義をちゃんと持った法学で政治経済学の一部に「法律」もとらえる必要がある、その上で人文科学と政治経済学という二つの柱が必要であろう、というのが今も変わっていない私の考え方です。

実は国連大学で私が学んだことなのですが、多くの国にお互いに相容れない大学があって、とくにその二つの流れを入れないと話にならない。乱暴な分類ですが、学際的な協力の三つの側面で、相容れない流れがあって、それぞれ一緒にしてしまおうと、無意味な水掛け論が起るので、別々に併存させて、色々な流れの研究者をうまくまと



高橋源一郎（たかはし・げんいちろう）
1951年、広島県生まれ。小説家、文学者、
文芸評論家。2005年より明治学院大学教
授。現在国際学部付属研究所所長。著作
に『さようなら、ギャングたち』（講談社、
1982年）、『ぼくらの民主主義なんだぜ』
（朝日新書、2015年）、『読んじゃいなよ！
—明治学院大学国際学部高橋源一郎ゼミ
で岩波新書をよむ』（岩波新書、2016年）。

める、そういう国際学を独自の信念を曲げないで、できる必要を国連大学で学びました。三つの側面とは、まず第一に専門的な学問の掘り下げをする流れと、むしろ実社会の市民と対話しながらの学問をする流れ、第二には、今の現実の問題をわかりやすくとらえる流れと、今を歴史の長い流れ、いわゆるロング・デュレーの中で捉える流れ、第三には、社会科学と人文科学の二つの流れの違いがあります。その二つの流れをうまく組み合わせることで、国際学部を設計することを提案しました。具体的に言いますと、インドではデリー大学と JNU（ジャワハルラー・ネルー大学）。JNUのほうはマルクス主義、デリー大学のほうはガンジー主義、そういう両方がある初めてインドの特色が出てくる。タイの場合にはチュラロンコン大学とタマサット大学とがあって、お互い一緒に関与しない。だけれども、それをつなげないといろいろなことがわからない。官学を中心にものを

考えるのはあまりよくないのですが、実は国連大学では二つのプロジェクトで一つには一つの流れということで、チュラロンコンとデリー大学と東大、ジャワハルラール・ネルー大学とタマサットと京大、そういうふうにはプログラムをはじめからわかることにしました。京大のほうは要するに官僚養成ではないということで別のプロジェクトに参加してもらいました。東大のほうは官僚養成で、タマサットとチュラロンコンも同じことでわけました。どちらにも非常に国際学のことを深く考える方がいらっしゃるのです、そこるところからまず始めることがとても大事だということで国際学部にはそういう対立する流れをいれることを提案しました。

それから、国連大学で学んだことですが、研究ばかりやっている先生方も大変大事だけれども、研究ばかりやらないでいろいろな実践をやっている人もとても大事で、その実践をやっている先生たちを巻き込む必要があることを提案しました。

第三番目は、学生のほうも、ただ勉強するだけじゃなく、海外に留学をすとか、そういういろいろな経験をやる。特に NGO というのが新しく 80 年代に注目を浴びるようになっていたので、官僚養成とか国際感覚をもつ企業人だけではなく NGO の関係でいろいろな発言ができる、発言だけではなくて実際の活動もできるような、そういう人々を養成することができたらいい、という話をしました。今から考えると、日本でも常識的になってしまっているのです、国際学部の特色はあまり注目されないとおもいますが、創立当時では、かなり世間の常識とはかけはなれていました。たとえば、NGO の重視も、生態系・環境問題を合わせ学ぶ努力も、1990 年代に普及しましたが、10 年以上早く明学の国際学部でカリキュラムにも、そして先生になっていただく方々を選ぶ場合にも大事であったことを思い出します。

高橋 相当突っ込んで話をされたということですね。国際学部をつくる構想の段階で。

武者小路 そうです。

高橋 その時はもう、準備委員会というか、そう



武者小路公秀（むしゃこうじ・きんひで）
1929 年ベルギーブリュッセル生まれ。国際政治学者。専門は国際政治学、平和学。学習院大学、上智大学、国連大学（副学長）を経て 1989 年 4 月～1998 年 3 月明治学院大学教授。その後フェリス女学院大学教授、中部大学中部高等学術研究所長、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター（CAPP）所長等。著作に『転換期の国際政治』（岩波書店、1996 年）、『人間安全保障論序説』（国際書院、2003 年）、『人の世の冷たさ、そして熱と光』（解放出版社、2003）。

いうものはできていたんですか。そのあとですか。

武者小路 私とは無関係に森井さんが東大の福田歓一さんに相談に行っておられて、福田さんとも話をしようということで、福田さんとも話をしました。それから京大のほうは、どこから関係がついたのか、実は私ではなかったのですが、多田道太郎さんもそういう話しあいに参加してくださいました。

高橋 都留重人さんはそのあとなんですか？

武者小路 都留さんは、かなりあとからでした。

加藤 玉野井芳郎さんが最初のメンバー。玉野井さんが亡くなって。

武者小路 そうなんです。実は、先ほどいいましたが、生態系・環境問題をとりあげることで、特に経済学の側面の講義をしていただく先生が必要

でした。その先生として玉野井先生はうってつけの方でした。先生は、マルクス経済学と近代経済学の橋渡しをしながら、生態系の問題に接近され、当時、沖縄に移住されて、琉球王国からの先住民文明のなかで、環境問題に取り組んでおられました。そのお弟子さんたちとして、あとで、東大にうつってしまいましたが、丸山真人さんにきていただきました。しかし、玉野井先生ご自身は、国際学部の発足の前だとおもいますが、急病でなくなられてしまいました。それで、いろいろ考慮の上で、都留重人先生にお願いすることになりました。あまり知られていないことですが、都留先生は 1970 年に京都国際会議場で国際社会科学協議会が開いた、国連のストックホルム人間環境会議を社会科学専門家が準備する国際会議に、日本側から日本の経済学者として出席され、そのときの国際的な議論に巻き込まれて、ご自分も日本で環境経済学を始めた先生でした。わかりやすい議論で、今まで経済学は、グズ（良いもの＝商品）だけをとりあげてきた、これからはバズ（悪いもの＝環境破壊要因）も研究する必要があるという理論を展開されたのです。私は、京都会議で一緒に参加した、イグナチ・サックス（ポーランド系フランス人の環境問題専門家）から、都留さんがいかに素晴らしい形で、環境問題に取り組むようになったかを聞いていましたが、明学国際学部のおかげでお知り合いになりました。

加藤 経済は玉野井芳郎さんが……。

勝俣 都留さんは 1988 年。

加藤 いや、違う。都留さんは最初からいた。でもそもそもがピンチヒッター……。

高橋 玉野井さんが政治経済の担当で、福田歓一さんが……。

加藤 はい。僕がいまお聞きしてなるほどと思ったのは、森井さんは武者小路さんにまず最初にアクセスした。その一方で新学部の申請を文部省に知らせたい……。つまり文部省に強いんだよ、福田さんは東大法学部だから。

武者小路 そうです。しかし、福田先生は、実は南原繁先生と同様、キリスト教信徒であり、キリスト教＝プロテスタント批判主義的な立場で、政



加藤 典洋（かとう・のりひろ）

1948 年山形県生まれ。文芸評論家・早稲田大学名誉教授。1986 年 4 月～2005 年 3 月明治学院大学助教授を経て、教授。専門は現代文学・言語表現。著作に『敗戦後論』（講談社、1997 年／ちくま学芸文庫、2015 年）、『戦後入門』（ちくま新書、2015 年）、『村上春樹は、むずかしい』（岩波新書、2015 年）。

治思想史を研究しておられたことで、当然キリスト教主義の明治学院大学が招くべき方でした。ついでに福田先生について個人的に私が感心したことをご報告します。福田先生が厳格な思想史の専門家で、現実離れしておられるのではないかと思っていたところ、教授会のあとの雑談で、近頃の女子学生の間で、「アサシャン（朝シャンプーをすること）」が流行っているが、洗いすぎるのも頭髪によくないのではないかと、あまり政治思想史とは無関係な問題について話されたことを今でも覚えています。

加藤 文部省の大学設置委員会の委員か何か、かなり上のほうのところでしたので、やっぱりこういう人にもいてもらわないと通らないというようなことがあったと聞いた……。

武者小路 それもありますが、実はそういう話は全然福田さんとはしていないのですが、やっぱり福田さんは日本の正統なキリスト教の伝統で、私

のほうは旧教のカトリックですから、やっぱりちゃんとしたキリスト教の伝統を持った先生も出てくる必要があるということもあったようです。そういうことがありました。

加藤 なるほどね。

武者小路 それで、ついでに、言うべきでないことを二つ申し上げます (笑)。

一つは、東大と京大を入れたことはとても私はよかったと思っています。ただし、それはとても無理な話で、私が全然考えていなかったのですが、東大の先生にとっては教授会というのは一番大事なんです。

加藤 神聖なものなんだね。

高橋 そうなんですか (笑)。

武者小路 教えるよりも、研究するよりも、教授会が大事なんです。教授会があったから東大の法学部は軍国主義になびかなかった、ということは、坂本義和先生から何回か聞いた話です。確かにその側面もありますし、そのことはとても大事だということはわかるのですが、しかし多田道太郎さんをはじめ京大のほうから来られた先生方、それから大学ではなくて外務省とか企業とかにおられた先生方は、そんなに教授会なんて大事だと思っていない。特に多田さんたちは、教授会は本当につまらないところだと思っていました。実は私も国連大学で旅行する時に飛行機で寝られないと教授会に出ているというふうと思うと寝られるようになるという経験がありますので (笑)、私はどちらかといえば京大側についていたのですけれども、そういうことが一つありました。

もう一つだけ面白いことを申し上げたいと思いますが、森井先生はストラスブールで神学の勉強をされて、だからフランスのことが非常に好きなんです。つまり、アメリカだけを中心にもの考えることをやめて、フランス的な社会科学とか文学とか、そういうものもやるべきであるということを目頃から言われて、多田さんと話しあった時に、多田さんと私と三人の意見が完全に一致したんです。私は、母方の祖母がフランス人、曾祖母がケベックのフランス系カナダ人です。その上、ベルギー生まれで、1950 年代にパリ留学、リ

キュール先生たちの「エスプリ」誌でマルクス主義・実存主義・キリスト教批判主義を総合する雑誌の同人会で、フランス思想の影響下にいるので、森井先生がフランス思想に興味を持って、アメリカ流の国際関係論ではない国際学の学部をつくる点で全く同意見でした。しかし、曾祖母はケベック人というフランス系カナダ人で、そのおとぎ話とか子供の歌を聴いて育ったので、ケイジャンがフランスからカナダ、そこから米国のルイジアナ州に移住したことにも大変関心があります。その意味で、多田先生のケイジャン鼻根にも強く同感していました。ただ、どうしたら、森井先生と多田先生の橋渡しができるか、その当時から今でも、わかりません。完全に一致したけれども実は全く違っていた (笑)。というのは、森井さんの頭にあるフランスというのはデカルトのフランスでありパスカルのフランスであり、多田さんの考えているフランスというのは、ケイジャン料理をつくっているカナダからルイジアナ州に移住してきた人たちとかだから、オーソドックスな学問の伝統としてのフランスではなく、本当に生きている、しかもその中心ではなくて周辺のほうに関心があった。だから、カナダに行ったケベックのフランスの人たちのことを研究する必要もあるし、ケベックに居つかなくてルイジアナ州に移り住んだケイジャン料理をつくっている人たち、ニグロ・スピリチュアルとかそういうものもそこから出てきた、だからフランスは大事なのだ、と。ニグロ・スピリチュアルが出てくるからフランスが大事なのであって、デカルトとパスカルがいるから大事なのではない。

高橋 多さんらしいですね。

武者小路 そこにかなり面白い違いがありました。

高橋 そうやって、ある意味バラバラな人たちが集まった。東大と京大もそうだし、私学と官学だし、もともと国際学のようなことをやっている人もいれば、もっと周縁を大事にしようとする、けっこういろいろな方が最初の段階から集まってきたということですね。

武者小路 そうなんです。たとえば阿満利磨さん

は仏教ですが、NHK とか、そちらのほうのご関係が強く、どこかの大学の仏教学の大先生では全然なかった。それだから非常に面白い。私事になりますが、阿満先生のおかげで、他力本願のことや、タイにも日本にもある社会意識をもった仏教について勉強に引きずり込まれました。明学に来たおかげで、キリスト教だけでなく、仏教開眼ができるとは思ってもいなかったことです。

高橋 最初に学部をつくる時に、まずカリキュラムというか、講義科目をつくりますよね。国際学という学問がもともとなかったので新しくつくったわけです。国際法学とか国際平和学という、まあ当然あるべき講義科目があって、その中に加藤さんが教えられていた現代文学論と言語表現法と、あと竹田青嗣さんなんかがやっておられた哲学、そういったものを入れるというのはどういう経緯で決まったんですか。さっき武者小路先生もおっしゃいましたが、国際学には人文学が必要だということで意見が一致して、そういう講義科目がつくられたということですか。

武者小路 ということと、実は、それは正しかったと思いますが、科目が先にあるのではなく人間が先に、この方にはぜひ入って来ていただきたい、それでその科目は何にしようか、と。科目あって人ではない。法学とか法哲学ということも本当は大事だったのだろうけれども、ちょっと私も、法哲学は大事だといまでも思いますけれども、法学があんまり好きではないので(笑)、私も言わなくて、福田さんもどうしても法学を強化しようということではなかった。しかし、哲学一般ということではなくて、竹田先生の現象学は、実は私が学習院で政治学の代わりに法哲学を教わった尾高朝雄先生がドイツ留学で学んだフッサール直伝の現象学をさらに掘り下げた哲学でした。竹田先生は在日コリアンで日本名を持ち続けておられる珍しい先生で、彼のおかげで、哲学を勉強した人権の活動家である金泰明さんは、21 世紀にはいって、大阪経済法科大学のアジア太平洋研究センターで、人権法の研究会をつくる代わりに竹田さんを招聘して、哲学研究会を開きました。哲学一般の科目が大事なのではなく、竹田さんの哲学は国際



勝俣 誠 (かつまた・まこと)

1946 年東京生まれ。経済学者。明治学院大学名誉教授。パリ第三大学、ダカール大学法経学部、モントリオール大学客員教員等を経て、1988 年 4 月～2014 年 3 月明治学院大学助教授を経て、教授。専門はアフリカ地域研究、国際政治経済学。著作に『娘と話す世界の貧困と格差ってなに?』(現代企画室、2016 年)、『新・現代アフリカ入門』(岩波新書、2013 年)、『アフリカは本当に貧しいのか—西アフリカで考えたこと—』(朝日選書、1993 年)。

学に不可欠な、倫理と現実分析の境目で大変大事な思想への入門を助けたという事例を紹介して、国際学と個性的な研究者との結びつきを大事にしてよかったことを強調したいと思います。

高橋 ということは、最初の創立メンバーを選んだのは、武者小路先生、福田先生、玉野井先生、多田先生という感じですか。

武者小路 そんな感じですか。だんだんに……。

勝俣 あと、西川潤先生がいらっしやらなかった？

武者小路 西川さんも入っているというか、アドバイスをもらいに、相談に行きました。集まりにはあんまりお招きはしなかったと思います。

高橋 大体その 4 名ぐらいが中心メンバーということですね。

武者小路 はい。

高橋 それで、こういう方を招きたい、と。

加藤 あと、サイエンスの関係で豊田利幸さんが……。

武者小路 豊田さんの名前がでたところで、平和研究所の話にはいりたいと思います。国際平和研究所 (PRIME) のほうに初めから豊田さんと坂本義和さんが中心にあったわけです。だけれども学部と国際平和研というのは、関連はあるのですが、やっぱり、平和学というか、核問題とかそういうことを中心にしようということが初めからありました。

高橋 けっこうリソースを注いだという感じなんですね。平和研究所には。

加藤 そうですね。

武者小路 はい。実は国際平和研究所が国際学部に来たのでも、その逆でもなかった。

加藤 並立するはずだったのが、そうはならなかった。

武者小路 別々になって、国際学部には国際学についての付属研究所ができたのです。

勝俣 なぜ国際平和研究所が国際学部の先生方がこれまで比較的多くて、白金キャンパス 9 階でキリスト教研究所と南北にわかれてあるかということ、もともとは国際平和研究所というのは、いまいらっしゃる国際学部に付属する研究所としてあったわけです。それが 1988 年からなぜかメイガク全体の研究所だ、ということになった。付属研としての国際平和研究所の初代所長は国際学部の豊田先生で坂本義和先生、浅井基文先生、武者小路先生というふうになったんです。

高橋 二つ研究所ができたということですね。

勝俣 はい。ですから当初は国際学部の教員がほとんどでした。

武者小路 ただ、私が裏切り者になってしまったんですけれども、要するに純粋な平和学というのは、核戦争をやらせないというものから、もう少し広げないといけないということで、平和というものを広げて、それで国際学部の先生方にお入りいただいたのです。

勝俣 アフリカの貧困とかいうのは、初めは入っていなかったんです。

武者小路 国際平和研究所も、核問題の研究所としてつくられたと理解してもよいのですが、私は、やはり個性的な所員がいて、その獨創性をいかしてできた研究所だとおもいます。私なりの後知恵ですが、まず、所員としての豊田先生と坂本先生の獨創性、それに、若手でこの二人の研究所創設者を支えた高原孝生さんの個性的な学問と実践が、研究所をつくりだしました。あとから入った私が、勝俣さんのアフリカ研究に根ざした創造性を加えるキッカケをつくってよかったと思います。まず、豊田先生はたんなる核物理学の大先生ではまったくありません。核物理学をもとにして核兵器をなくす、それだけの核物理学者でもありませんでした。はじめから、核をもてあそぶこと、核兵器だけでなく、核原発にも、倫理的に反対しておられた方です。実は、私は 90 年代後半になってから、豊田先生に鋭くしかられて、そのことをいまだに忘れられず、しかられたことで目が覚めたことを感謝しています。わたしは、伏見康治先生のご活動に協力して、1990 年代後半に広島でパグウォッシュ会議が開かれた際に、先生が、原発会社の献金をうけとったことでしかられたのです。豊田さんの倫理的な反核反原発のお立場のもとには、先生のイタリー語を勉強したルネッサンス科学史から始まる研究の積み重ねがありました。その話は長くなるのでしませんが、そういう科学の歴史的で倫理的な考え方が、国際平和研究所を支えてきたのです。また、坂本さんの平和学は、単に東京大学の先生としてではなく、プロテスタント批判主義の南原先生の流れを汲んだ平和主義がありました。また、国際的なプロジェクトで未来秩序を総合的に研究した経験、国連の研究・研修期間である UNITAR で国際的な研究交流をされたことで、単なる核兵器に反対する研究ではまったくありませんでした。そこに、国際平和研究所の問題関心を広げるきっかけをつくったのが、若手の高原孝生さんだったと思います。彼は、単なる平和研究の研究者ではなく、神奈川県川崎市の平和に関する市民運動、多文化的な在日コリ

アンを巻き込んだ運動に参加しておられたことを覚えています。そういう実践活動に開かれた国際平和研究がもとになって今の PRIME ができ上がったのは、高原さんのおかげです。それで、アフリカを中心に南北問題を対象にしていなかった PRIME に、勝俣さんにお入りいただいたことで、かなり研究所の研究対象と国際学部の多元的な研究方向がかさなったのです。もともと勝俣さんと個人的にお近づきになったのは、マンデラのおかげです。それに、国連大学で私的にも影響を受けたサミール・アミンが、セネガルの大学に来られた勝俣さんを大変評価していたことを覚えています。私が豊田さんの後で所長になって唯一貢献したのは、ただ、勝俣さんを引っ張り込んだことだと思っています。それで、国際学部と国際平和研究所の問題関心が重なるようになってきたと思います。高原さんは実は両方やっているということもあって、要するにだんだんに多様化したというのか、それで学部付属の研究所と平和研というのがつながりができたということがあると思います。

高橋 国際学部ができるまでの道筋というのを僕も初めて聞いて、そういうことだったのかと……。

加藤 少し補足を、僕が知っている範囲で。ちょっとだけ付け足すと、確か発足直前に玉野井さんが急逝されるんですね。

武者小路 そうなんです。

加藤 それで経済部門の中心の先生がいなくなったので、玉野井さんが呼ばれた先生も何人か学部の中にはおられたことから、そこで明学は困って……。

高橋 まだ発足していなかったんですね。

武者小路 直前ですね。

加藤 発足直前。文部省を通さないといけない。それで明学の何代か前の学院長が都留仙次さんで、都留重人さんの叔父にあたっていた。そんな関係で森井さんがかな、都留重人さんのところで急遽お願いに行き、都留さんはそれを引き受けた。それで、まず武者小路さんがいて、プラス福田さんと都留さんと多田さんで、三つの群ができるんです。

高橋 三群制度というのは、そういうことだった

んですか。

加藤 そういうことで、一群は文化で多田さん、二群は経済で都留さん、三群は政治で福田さん。プラス国際平和研究所に豊田さんがいて、あと武者小路さん、という体制ができて、その時にはまだ坂本さんは来ていない。坂本さんという名前は拳がっていて相談とか何かはあったんだろうけれども、坂本さんはまだ東大にいて、しばらくしてから着任された。

武者小路 そうなんです。

加藤 多田さんも来ていない。多田さんも2年してから88年に着任した。

武者小路 坂本さんは実は平和研のほうに関心があって、でも教えるということで、じゃ国際学部で教えるということになりました。

高橋 初代の学部長は？

加藤 福田さん。

高橋 福田欽一さんなんですね。

武者小路 それで、詳しいことは私もよく知らないのですが、都留さんがだんだん高齢になられて、お辞めになったほうがいいということを中心に言いながら、誰も言い出さないで困っていたことを覚えています（笑）。

加藤 あれはどういうことだったんでしょうね。都留さんはとっても怒られた。要するに都留さんの理解は、急に呼ばれた時にはすでにもう定年を超えた高齢だったわけで、それでもどうか、と懇望されて承諾した時には、都留さんには特例を適用してずっと長くいていただくみたいな形だったと都留さんご自身は理解していた。海外の大学にあるような……。

武者小路 そうなんです。

加藤 自分でもそのつもりで、ここに骨を埋めようみたいな気持ちで一肌脱いだ、ということだった。いまでも学部長室に荻須高德の絵がかかっているでしょう、あの荻須はじつは都留さんの私物なんですよ。その私物がまだ返っていないんです。

高橋 そうなんですか。

勝俣 そう。だから僕は心配でね。別の教員控室にあったのを学部長室に移してよかったんだ。あれ、なくなったら大変ですよ。

加藤 とられたら大変（笑）。「なんでまだここにあるの？」とこの間、10 年ぶりかで学部長室を訪れた時、竹尾（茂樹）さんに訊いたんだけど。

そういうふうにいるいろ、尽力されたよね。教員の親睦のためにちゃんと全員夫人同伴で氷川丸なんかでパーティーみたいのをやったり、非常に日本的じゃないようなことをたくさん提案された……。

勝俣 彼はハーバード大学のカルチャーをそのまま持ち込んだんです。できたばかりだから。大学の中にもゲストハウスをつくれと言っていたんですね。ゲストハウスはお昼からワインとかそういうのを飲めるようにしろと言っていた。内心うれしかったですね。

高橋 都留重人さんが？

加藤 そう。あと多田さんは、学部棟にシャワー室。そこに泊まれるようにしようということで。だから、もとは 8 号館の中にシャワーがついていた。

武者小路 そうそう。

加藤 いまもある？

勝俣 二つあったと思います。朝、丘の上のキャンパスまで登り歩いてくると皆やたらと汗をかくので、いっぺんに入れるように、二つあるのかと思っていました。

高橋 聞いていると、自由な感じでいいですね（笑）。

加藤 それで、階段教室みたいなものがあるでしょう。あれは学生が寝転がって授業ができるようになってつくった……。

高橋 そうなんですか？

勝俣 はい。大小の座布団がいくつもあるんですよ。

高橋 確かに大きな、寝転がることのできる布団みたいなものが奥にたくさん置いてありますね。

勝俣 鼠色の。まだ置いてあるみたい。

高橋 いまでも残っているけれども、あれってそうなんですか？

勝俣 あれは、問題は洗濯していないということなんですよ（笑）。

武者小路 それはかなり問題だ（笑）。

高橋 いま 821 教室にありますよ。あれは昔からあるやつなんですか？

勝俣 そう。あれは洗濯に出したほうがいいですよ。

加藤 あそこはそういうふうにしてやっていたの。あのころは。

高橋 学生がゴロンとできるように？

勝俣 そうそう。あれは本当にたいしたものですよ。

加藤 ローマの元老院式に、寝転がって議論していいじゃないか、と。

高橋 それは都留さんが言い出した？

加藤 それは多田さん。あと竹尾さんも。

武者小路 そうですね。

勝俣 ですから都留先生がいる時は、いわゆる世界史の教科書に出てくる貴族が来て……みたいな。横浜でみんなでパーティーをやったんです。忘年会を。

加藤 氷川丸でやったんだ。

勝俣 その時は都留さんの奥様がいらっしゃって、たまたま氷川丸にグランドピアノが置いてあったんですよ。それで、都留さんの奥様がピアノを弾いて。彼は蝶ネクタイで来たわけですよ。

加藤 都留さんはいつも蝶ネクタイだものね。

勝俣 それで歌を歌った時、僕らはお返しをしなきゃいけないという話になったわけですよ。われわれ若い教員が。それでなにか返すものがないかと言ったら、そのとき JETRO という通産省関係の市場調査機関からこられた江橋正彦さんという同僚が突然進みだして彼の指揮で皆でお返しの歌を歌ったんです。

加藤 知らないな、俺。

勝俣 彼が選んだ歌はポッポポ、鳩ポッポ（笑）。本当に西洋のクラシック音楽に対して日本の童謡ということでコクサイ的で、すごく楽しいところに来たなと思いました。

武者小路 その多様性がよかった（笑）。実は、江橋さんは日本の中小企業が、開発途上国の適正技術を日本から提供する大事な仕事をしていた経験を生かす、都留さんとは補完しあう先生でした。まさにクラシックを補完するハトポッポの先生で

した。

高橋 面白いなあ（笑）。

それで 86 年に国際学部がスタートするわけですね。加藤さんは 86 年からですか。

加藤 僕は最初の年から来ました。86 年の 4 月から。

高橋 勝俣さんが少しあとなんですね。

勝俣 はい。

高橋 どういう経緯で入られたのかを、まず加藤さんから。

加藤 僕の場合は多田さんに呼ばれたんです。なんで多田さんに呼ばれたかといいますと、ケイジャン料理の関係もあるのか、僕は国会図書館にいたんですね。僕は大学を出た時に 2 年留年しています。あんまり授業がなかった時、66 年に入学して 2 年留年して 72 年に出るんだけれども、学校の先生ともだいぶ対立していて卒論は指導教員なしで書いたうえ語学力にも劣っていたので、大学院を受けたけれども 2 回も落ちて、就職試験も出版社は全滅、かろうじて国会図書館だけ引っ掛かって拾ってもらった。しかし勤めるうちやっぱりいたたまれなくなって、たまたまモントリオール大学——フランス語系の大学です——で新しく図書館で日本関係の研究所をつくる、と。それは、田中角栄が北米カナダを訪問した時に百万ドルの基金というのを置き土産にした。それをもとにしてカナダの大学が三つの日本研究センターというのをつくったんです。バンクーバーとトロント、三つ目がフランス語系の大学というのでモントリオール大学と英語系のマギル大学が折半。

マギル大学というのは「カナダのハーバード」なんて言われるような名門だから前から基礎ができていたけれども、モントリオール大学というのは、フーコーなんかも客員で来たりしたところだけれども、後発。当時のケベックのナショナリズムの中心です。フランス語系で、東アジア研究は手薄だった。そこに新しく研究所をつくるというので、国会図書館に人材派遣の要請があった。職員が公募されて派遣されたの、僕は二代目なんです。一代目が非常に優秀で、岩波の安江良介という社長がいた、あの人の弟なんです。

原 やっと出番が回ってきました。安江明夫さんですね。実は私も 1986 年から一年間だけ国会図書館の職員をしていましたが、そのときにもおられました。

加藤 最後は副館長までやった。この人はまったく官僚的じゃなくて、あとでホー・チミン髭なんか生やしていた。こちらのほうがチャレンジングだと、ユネスコに行くのをキャンセルして、ケイジャン料理の故郷にやって来て、新しい大学の図書館づくりをはじめたんです。英語もフランス語もできる。きわめて有能なので実質的な所長として研究所を切り盛りした。その安江さんが、ほとんどそのセンターの基礎をつくったんです。

これに対し、二代目の僕は、国会図書館の中で完全に札付きになっていて、もうにっちもさっちもいかない状態で（笑）、よくも僕の公募の書類を人事課が外に出してくれたと思うんだけど、とにかく、何とかピックアップされて、そこに来たわけです。

そうすると一代目の人がやった仕事が期待されるわけ。最初はわからなかったけれども、これがほとんど所長の仕事だった。その研究所は、最初にお金がついたのでボンと大きくなったでしょう。その後、ぼしゃる時期で着任早々、すぐにデフィシット（破産）騒ぎ。僕は朝の 4 時まで研究所に残って働いていました。誰もやらないから。一人でいままでの予算とか何かを調べ、全部やったので、だから経済的な用語を数多く覚えた（笑）。

研究所を建て直し、2 年の予定だったけれども、「もう 2 年」いてくれと言うから 4 年いるはずだった。でも、マギル大学に来ていた鶴見俊輔さんに相談して、日本文化の授業の客員教授として多田さんと呼んだところだったんですが、途中で所長と喧嘩して、3 年半で帰って来たんです。多田さんは、自分のことを呼んでおいて、僕が「もう帰りますから」と言ったら、「あんた、それはないやろ」と言いましたが、僕がすごく有能だと知っているわけ。そこでの僕の仕事ぶりを見ているでしょう。それは僕がいままでの全人生で唯一、例外的に真面目にやったケースで（笑）。だからそのあと、多田さんは、この明学国際でも当然やると

思って、「君、研究所を手伝って」とか何とか言ってきたけれど、申し訳ないことに国際では、全部断ったんです。それをやっていたら、自分の仕事ができなくなっちゃうから。

でも、そんな経緯で、多田さんをモントリオールにお呼びした。その後、一足早く帰ってきて、ちょっと物書きみたいなことを始めて『アメリカの影』を書いた。

高橋 82年ですね。

加藤 で、この大学ができる時に 84 年の終わりぐらいかな、「来ませんか」という話をもらったわけです。僕は大学院も行ってない。本は 1 冊出してはいたけれども、それだけ。ほかにも自問自答がありました。「大学解体とか言っていたやつがなんで大学に行くんだ」と。家族も、反対でした。

武者小路 なるほど。

加藤 それで、もし行くなれば家族には迷惑をかけるなというので、僕はずっと 2 時間半かけて 19 年間、通いつづけたわけです。埼玉から。娘がちょうど逆方向の飯能の自由の森という高校に行くようになったので、引越せなかった。最初は断ったんだけど、やっぱり悪魔の囁きでね。あのころ文筆業と二足のわらじで睡眠時間が少なかったんで、お話を受けた。「もう少し待つ」とか言ってくれたのでね、最後は、「行きます」って。

高橋 それで最初から。

加藤 それで行ったんですが、行って、最初の教授会に出席して、本当にカルチャーショック。先の武者小路さんの話がよくわかる。

高橋 どういうショックだったんですか。

加藤 「こういうところなのか」って。

高橋 大学が？

加藤 そう。まだ授業自体が始まる前だったんです。85 年で。僕はその日ずっと教授会に出ていて、いまでもおぼえているけれども帰り、戸塚の駅まで来て、ホームで思わず 500ml のビールを買って、ベンチに腰掛けてそれをごくごく飲んで (笑)。

高橋 教授会に出るのに？

加藤 いやいや終わったあと。帰り。

勝俣 解放感で？

加藤 ビールでも飲まなければここでやっていけ

ない、と思った。何とか助教授とか何とか講師とか呼ぶんだよ。福田さんが。何とかさん、じゃないんだ。

高橋 役名で呼ぶわけですね？

加藤 いま考えれば東大法学部流なんだろうね。何とか教授はどうですかとか、何とか助教授はどうですか、でしょう？ こちらは元全共闘だからねえ。なんでいちいちそう言うんだなんて思って聞いていた。その時に 1 号館と 8 号館で研究室の振り分けがあったんです。振り分けの時に外国人の教師が 5, 6 人いたんだが、1 号館というのは学部棟の 8 号館から遠い。不便なんです。「じゃ、一応 1 号館には外国人の先生方に入ってください、というふうにしてやろうと思いますが」と学部長が言って、そのまま何気なく進行するわけ。僕は手を挙げて、「その話はちょっとおかしい。この人たちはわかっているんですか」と、下手な英語で、外国人教師に向き直って、「あなた方、いまの話はどうなっているか、理解したうえで承しているんですか」などと言ったので、福田歓一さんにとても悪いことをして (笑)。

その時に、誰が書記をするかというので、森本栄二さんが最初に指名されていた。書記が二人要るわけ。一人は森本さん。そうしたら、「加藤助教授は物書きをされているから書記にちょうどいいでしょう」と (笑)。それで書記になったんですよ。最初の教授会から 2 年間、森本さんと僕が書記。

勝俣 ちょっと付け加えていいですか。

僕が森本さんと加藤さんが偉いなと思ったのは、要するに書記というのはやらないのに越したことはない通過儀礼の人事だったんですよ。若手から順番にやるというね。福田先生がまた森本さんを再任したんですよ。それはやっぱりかわいそうですね。だって、ふつう順番にやるわけでしょう。僕にもその後回ってきました。僕は適当にやりましたけれども。その時に加藤さんが「これはおかしいんじゃないか」と言って、それで別の人になった。2 回やって。憶えているでしょう？

加藤 いや、憶えてない (笑)。

勝俣 森本さんという方は僕の尊敬する同僚で、国連にいた方でアカデミック的研究や学問にあまり

関心のない方なんです。

加藤 森本さんは僕はすごく好きです。抵抗して教授にならなかった。

武者小路 そうそう。

加藤 助教授になる時も、ならないと言って専任講師を 10 年ぐらい続けて、辞める時に助教授になったかな。

高橋 ずっと抵抗してたんですか？

加藤 20 年ぐらい。

武者小路 とにかく、すごい骨のある人でした。

勝俣 骨のある方で、彼のアフリカ社会や人の見方というのは僕のを上回る上位の規範に基づいていて、アフリカの悪口を言うと彼にいつも怒られたんです。

加藤 アフリカ勉強するならこの人物、と思った。

勝俣 いわば懲罰人事的に受け入れさせられた教授会の議事録を、東京駅かどこかの網棚に忘れてきちゃったんですよ。これもまた、ものすごく怒られたらしいんですね。僕は教授会にはすべて集中できなかったけれども、森本先生が本当は残すべきあれは誰が残しているか。テープにとっていなかったんですね。その時に活躍したのが、福田さんと同じ専門の政治学の高原先生が自分のメモを再構成して……。

加藤 そう。すごくきれいにメモをとっていた。高原さん。

勝俣 いまもとっていますね。彼は全部とっていますから。さすが国際政治学者です。

高橋 ずっととっていらっしやいますね。

加藤 その時のことは憶えてる。でも僕はかなり、言わなくていいようなことをよく言って福田さんとぶつかったけれども、僕の中で福田さんの印象は、そんなに悪くないんですよ。あの人は書くものについての好奇心はけっこうある人で、僕が何かいろいろ書くと、全部読んで言ってきてくれた。紀要の論文に「矮小」という字を「倭少」と書いたら、その誤字をハガキで指摘してくれたこともある。学恩がある。

勝俣 ちゃんと読んでいますよ。わたくしの本の感想を言われたり、寄稿記事には郵便ハガキで手書きの丁寧なコメントと励ましまでいただいたこ

ともあります。今思えば研究室の引き出しに入れたハガキはどこに行ったのか……。

武者小路 そうそう。

加藤 学問的などころでは僕はあの人をけっこう尊敬していました。厳密でね。よく喧嘩したんですけどね。

高橋 人としては、東大的な感じの人だったんですか？

加藤 もちろん。

武者小路 東大そのものです。

加藤 すごく権威的な人間。東大法学部というのはこういうところなのかというのが、よくわかった。でも人間としては学問的に柔軟、また、質素なお宅に住んでおられた……。

高橋 加藤さんが来られたことについてはだいたいわかったんですけど、勝俣先生は？

勝俣 いま加藤さんの話を久しぶりに聞いて重なる部分があるんですが、僕は 1988 年に着任したんですよ。86 年に学生が来だしたわけですね。

高橋 2 年後ですね。

勝俣 そう、2 年目です。だけれども、まさに加藤さんがおっしゃった通り、80 年代の初めに東京から、私はたまたま新渡戸フェローシップという、外国で 2 年間好きな研究ができるという当時日本で一番社会科学の中で贅沢な海外研究プログラムでした。支離滅裂な好奇心でしか学びをしてこなかった自分は無理だろうと思って受けたのですが、その時なぜか同じく面接に来た高橋和夫さんと上野千鶴子さんと意気投合しました。

原 高橋和夫さんって、放送大学のですか。いま同僚になっていて、教授会でいつも隣同士になります。

勝俣 彼はその時非常勤だったのかな。上野千鶴子さんは奈良の大学ですよ。僕は審査員にとって名の知れない——そんなこと言っちゃいけないけれども——通産省の管轄だったアジ研（アジア経済研究所）と同じような、貿易研修センター（通称貿易大学）という富士山麓にある、いわゆる大学院大学の常勤講師だったんですね。その時に新渡戸フェローが受かったので、82 年から 84 年にかけて西アフリカの大学（セネガル・ダカール大

学、現シェイク・アンタ・ディオブ大学)と英国の大学(LSE)にいたわけです。その時に東京から、新しい学部ができる、と誘われました。それは横浜のキャンパスだと言うんですね。それが国際学部。あなたは86年の開始時から働けるということで、僕は84年ぐらいに日本に戻って、すぐ働かせてほしいと言ったら、森井先生をサポートしている副学長の方が、あなたの南北問題という科目は学部生が3年次にやる専門科目だから2年待ってくれ、と言われたんですよ。

高橋 1年の時には要らない、と。

勝俣 それで困ったなと思った時に、まさにモントリオール大学で、多田道太郎先生の後釜として僕みたいな者がどうかと、とりあえずカナダでのポストが決まりましたが、国際学部行きは、その時すでに決まっていたわけですね。

加藤 多田さんはフランス語で教えたから、多田さんがいなくなったあとに、そこに来た。

勝俣 本当にそれは運がよくて、多田さんの楽しい噂もずいぶん聞きました。さっき彼が言ったように、東アジア研究所というところなんですね。確か。実質的には国会図書館から来たエリートが全部いわゆる事務をやって、人事もそれで決めていたみたいですね。

加藤 そう。人事権なんて全部僕が持っていた(笑)。

勝俣 そうでしょう? それで、僕もいよいよ横浜に行けるというので、私はたまたま箱根生まれの祖父が明治維新後、これからは太平洋の時代だと代々継いだ温泉旅館を売って、横浜で役所の仕事をしていたんですね。明治時代の人なんですけれども。だから港に近いところというのはすごく開明的なイメージがあったから、楽しみにしていたんです。でも実際は、ご存じの通り、横浜キャンパスという名前ですけれども、戸塚なんですよ。

高橋 山の中ですから。騙されちゃうよね(笑)。

勝俣 初めて行った時にうちの娘が、まだ小さかったんですけれども、横浜というのは漁港だと思ったんですね。彼女は日本にいなかったから。「新鮮なお魚を買って来なさい」なんて言われて(笑)。いざ行ってみたら、横浜の次の駅というの

は戸塚でしょう。東海道線は一駅の間がものすごく長いんですね。

武者小路 そうそう。

勝俣 戸塚駅に降りたらどンドンどンドン山の中へ行って、今度は住民運動があって、ご存じの通りあそこには小田急分譲地というのがありまして、その住民の方々の反対運動があったらしいんですね。だから江ノ電のバスが入れなかったんです。それで僕らは歩いて、都留先生みたいな地位のある方はタクシーで。僕らとか学生は、なるべく歩くことを勧めるというような時でしたね。

高橋 バスがなかったんですか。

加藤 バスがなかった。最初は。

勝俣 だから、加藤さんは2時間半だけれども、僕も2時間ぐらいかけて杉並から遠足モードで行ってということですから、泊まりがけで行っていました。あのころは、何人かの教員は8号館というところで泊まっていた。守衛さんが夜来ても、知らん顔して内側から閉めていれば気がつかなかったから。そういうようなことで、ものすごいド田舎だったですね。

そして、行って初めて気づいたんですけども、教授会に出た時に、どこかで聞いたような名前の先生が何人もいらっしやって。

高橋 偉い先生が(笑)。

勝俣 けっこう新学部のあり方や運営をめぐる対立しているのを横で見ているんですね。僕ら、「スターウォーズ」なんてよく言っていた(笑)。

加藤 そうそう。「スターウォーズ」と言っていた。

高橋 喧々譁々だ。

加藤 福田さんと都留さんがぶつかったね。

高橋 東大と京大がぶつかる(笑)。

勝俣 いや、都留先生は一橋なんです。

武者小路 そうそう。

加藤 もともと都留さんというのは、高校の時に反戦運動をやって捕まって退学(反帝同盟事件)。名古屋の旧制八高の1年生か2年でストライキをやって検挙されるんです。ところが父親——その時の中部電力の名古屋支店長なんです——が、息子がやったことは息子が責任を持つてというので、そのままにした。ほかの大半の父兄は、自分の息

子が捕まったので学校を欠席になると申し出ているんですよ。でも何も言わないので無断欠席。数週間ほどいて、戻って来たら除籍処分となるんです。それで、もう日本では上の学校に行けなくなった。お父さんが「どうする？」と言うのに、「自分はマルクス主義をやりたいので、ドイツに行きたい」と答えたら、ドイツはだめだと言うので、300万円くらいだったか、確かではないですが、お金を渡すからアメリカに行って一人でやれというので……。

高橋 それでハーバードへ行かれたんですか？

加藤 いや、最初はローレンスカレッジという中部の小さな大学。そこに1年いて、そこからハーバードに行く。自力で自分の道を切り開いた。

高橋 すごいですね。

加藤 そういうふうにして、ハーバードでは今度、大秀才で、そのあとそのまま……。

高橋 鶴見俊輔さんと会うわけだね。

加藤 鶴見俊輔さんも来るんだけど、その時にもう講師です。アーサー・シュレジンガー・シニアの下にいて、「三人の大秀才」の一人に数えられていたらしい。ハーバードで。

それから戻って来て、戦後安本（経済安定本部）で次官待遇の副委員長などを歴任したあと、一橋の教授になり、70年代初頭、ちょうど大学紛争のあおりで学内事情も加わり、誰も引き受け手がないとき、一橋に関係のない人間ということで学長に推され、引き受けた後、結局今度は一橋の人間じゃないというのでそこから追い出されたような人です。だから、一回怒ると、すごく怒る。

勝俣 非常に芯のある先生で、都留先生と同じ経済学の群で僕は彼の下にいましたから、正論を吐く人で、彼が最初に僕に教えてくれたのが小見山酒店という酒屋なんです。一番キャンパスに近い酒屋はどこか教えてくれた。彼ははっきりといつも教授会で学問のあるべき原則を語るんですね。それは偉いな、と。ただ、私を学部長には絶対投票するなと福田さんの後釜の時にはおっしやっつて、それでも彼に票が入っちゃう。

高橋 学部長になったでしょう？

勝俣 ならないです。

高橋 なってないの？

勝俣 結果としてそうになりました。

加藤 あの人は、教授会でこういうふう椅子をぐるぐる回して腰をかけて勝手にしている。で、あとから「加藤君、君の似顔絵だよ」と、くれたりするんですね。いろいろな人の似顔絵を描いている、教授会のあいだ。もう失くしちゃったけれども。

僕も何かで一度、学部の開設時に図書館に一挙に入れる学部蔵書の納本でどうも丸善から不要本をつかまされ、重複購入の本がたくさん入っているという疑惑が生じ、その調査を元図書館員というので委嘱されて調査したんです。苦労した調査結果の報告を教授会でとうとうと述べていたら、「君、もういいかげんにしてくれないかな。今日は用件があって、僕は時間がないんだ」って。そういうことを言う人なの（笑）。いつも後ろを向いていて、教授会で誰かがくどくど説明していると、「とにかく、もうこれくらいいいんじゃないか」みたいな感じでね。空気は読まない。だから、よくぶつかっていましたね。福田さんと。

勝俣 彼はエスタブリッシュメントに対して常に、「大学ってこういうものだ」と言う人で、さっきも申し上げた通りゲストハウスをつくるべきだ、と。そこで昼間からお酒をちゃんと出すべきだ、と言った方でしょう。

加藤 そうそう。昼にもワインを、と。

勝俣 彼はやめる時、さっきの補足説明をすると、組合が彼を——彼は契約書を結んでいなかったわけですよ。ある意味でサポートしてよかったんですけれどね。当時、いろいろな先生が早く出て行かれて、武者小路先生だって慰留すればいろいろ超法規でできたんですよ。それを十分にやらなかったとか、ある程度僕は先生方に申し訳なかったと思うんですよ。

高橋 流出しちゃったわけですね、先生が。

加藤 あの時は、早く辞めてもらおうという声が多かった。

武者小路 そうそう。慰留する超法規的なことは、国連職員をしてきた立場ではできませんでした。今でも残念ですが、ルールは大切にすることが正

しかったと思います。そのことをはじめからちゃんと都留さんにいわなかったことがマズかったと思います。

勝俣 そういうのがあったかもしれないです。ですから彼が辞める時も捨てぜりふで、「本当は伊東光晴君をここに推薦しようと思ったけれども、呼ばないよ」と言っ

高橋 伊東光晴さんって横浜国大じゃなかったですか、確か。

勝俣 そう。

加藤 『複合不況』の宮崎義一さんがその前、ここで教えていた。

勝俣 そうそう。岩波新書で『世界経済をどう見るか』を書いたエコノミスト。

加藤 あの人も都留さんに呼ばれて来ていたんです。結局あの時に大学が都留さんを切ったので、僕も都留さんから、辞められた後、「君は明学の人間だ。君とはもう会いたくない」と言われたんだけどね。それまで、僕は、当時学生だった鶴見太郎くんなどと、鶴見俊輔さんからの暗示もあって、研究所の仕事の一環で、都留さんの聞き書きをしていたの。ビデオで収録して。この研究所にテープが残っていると思うけれども、そのテープは使っちゃダメなの。一切その使用は断る、それは使うな、という葉書が来て、テープ起こしだけはさせてくれ、という依頼に対し、「もう会いたくない」と言われた。都留さんが大学から切れそうになったとき、宮崎義一さんと僕とで、教授会の時、こもごもに立ち上がって、この人をこのように処遇するのはいかにも不当だと抗議して、発言したんですよ。宮崎さんもすごく怒られて、「こんなふうにならざるに不当な決定を強行するようなどころにはもう会いたくない」と洩らされて、そのあと、しばらくして辞めた。

勝俣 辞めましたね。

加藤 それで伊東光晴さんは来なかった。

勝俣 僕が教授になれたのは宮崎さんがいたおかげかもしれないんですけども、彼は全体像を見る人で……。

加藤 とても公平な人だった。

勝俣 というようなことで、僕が来た時の教授会

の話をしたんですけども、僕は子どもの頃から大学というのをよく知らなかったんですね。国立の大学というのは受験科目が多くて経済的に難しい人が行く。私立というのは個性本位である、と。僕は自分がたまたま私立だったから、そう思ったんだけど、明治学院大学の国際に来て初めて、そういう……。全然意味がわからなかった。法学部なんて言われてもね。僕が入った時には、そういう流れはなかったんですよ。いろいろな人がいてね。その意味では、入った時からだんだんと、学問の世界というのは閥があるのか、と。僕は学者はみんな自由にやりたい放題だと思っているし、都留さんみたいな人ばかりだと思っていたからね。

高橋 そうでもなかった。というかだんだんそうではなくなっていった。

加藤 僕なんかも、けっこう無頓着で、教授会で勝手にいろいろなことを言っていたでしょう。びっくりしていたね、宮崎義一さんが。「こんなところがあるとは思わなかった」って。東大とか、国立系大学とか、そういうようなところから来たような人には珍しかったらしい。

武者小路 都留さんのもう一つの面白いところは、彼の世代で環境問題、生態系の問題を、彼は「グッツ (Goods) があるとバズ (Bads) がある。だからグッツの話だけじゃなくて、バズの話もしなきゃいかん」という、非常にわかりやすいあれをやっている……。

加藤 不経済領域というのをつくった。

高橋 経済学的観点でね。

加藤 「世界で最初に経済学的観点から環境問題を取り上げたのは僕なんだよ」と言っていたね。

武者小路 そうそう。

勝俣 だから都留さんは自分でゼミをなさる時に、もともと玉野井さんの環境の経済学系だった、いまいる熊本一規さんと都留さんがゼミを合同でやったんです。

武者小路 都留さんが、年齢の問題もあって、要するにもうこれでおしまいという話を本当は学部長がするべきなんだけれども、学部長は対立していることもあって自分からは言い出しにくい。

勝俣 誰？

武者小路 福田さん。それで、これは学長がやるべきだ、と。学長は理事長がやるべきだ、と（笑）。だから私は、丸山眞男先生の「日本には無責任の体系がある。天皇制のためにそういうのが出てきている」という話で、「確かにそうだけれども、どうもこの大学もそうだ」と言ったら、「それはちょっとひどいよ」と言われて福田さんにしかられました（笑）。でも、結局彼のやり方は無責任の体系の典型例だと思います。

加藤 ははは。それで誰が言ったんですか、結局。

武者小路 やっぱり学部長が最終的には言ったんです。「無責任の体系じゃまずい」と言ったから、言ってくれたのかもしれませんが。

高橋 あとでまた時間を遡ることになると思いますが、天皇制の話が出たところで（笑）原さんにお聞きします。原さんが明学に来られたのは少しあとということですが、何年ですか。

原 2000年に助教として着任です。

高橋 それで2016年3月までですね。加藤さんは、それまで大学で教えた経験はなかったんですね。

勝俣さんは？

加藤 勝俣さんは一応学者でやっていた。

勝俣 そうそう。モンリオール大で教えていましたから。一応 Invited Professor ですから。僕みたいな駆け出しにも一応招聘教授だものね、あれ。

加藤 原さんは、その前は山梨学院大学にいて、大学での研究も教員も経験があって来られたんですが、来られた経緯を……。

原 全然発言できなかったもので、一気にしゃべらせていただきます。明学に来る前に3年間山梨学院大学にいて、ずいぶん変わった大学だったんです、山梨学院という大学は。いわゆるスポーツ大学なんですね。そこは公募で行ったんです。政治学の公募は珍しかったんだけど。当時は東大社研（社会科学研究所）の助手を任期切れでクビになっていて、定職がなかったから迷わずに応募したらいきなり助教として採用され、甲府まで2時間半ぐらいかけて通っていました。本当に毎週毎週旅行しているような気分で、「あずさ」とか「かいじ」とかに乗って通っていました。山梨学



原 武史（はら・たけし）

1962年、東京都生まれ。政治学者、放送大学教授、明治学院大学名誉教授。専門は、日本政治思想史。2000年4月～2016年3月明治学院大学助教授を経て、教授。著書に『大正天皇』（朝日新聞社、2000年、毎日出版文化賞受賞）、『滝山コミュニケーション1974』（講談社、2007年、講談社ノンフィクション賞受賞）、『皇后考』（講談社、2015年）。

院大学は、相当個性の強い大学で、要するにワンマン大学だったんです。1998年に、『「民都」大阪対「帝都」東京』という拙著がサントリー学芸賞をもらって、その時の反応がすごく面白くて。山梨日日新聞という地元紙があって、かなりシェアの高い新聞で、これの社会面に三段ぬきで出たんです。写真入りで。原武史助教授がサントリー学芸賞を受賞する、と。それで学内が大騒ぎになりました。それまで駅伝で優勝するというに賭けていたわけじゃないですか。それが、いきなりそんな学芸賞とかをとった教員が出てきたとかいって、全くそれまで想定し得ないことが起こって、それで学長のところにももちろん報告に行ったわけですよ。一緒に行った学部長が言い間違えてサントリー学術賞と言ったところ、学長だってその新聞を見て初めて知ったのかもしれないのに、学部長に向かって「この賞を知らないのか。有名

な賞だぞ」とか言って(笑)。さらには「これはヒットじゃなくて二塁打だ」とか言い出して(笑)、二塁打の根拠がよくわからないんだけど、「次はホームランを打て」とか言い出すんです(笑)。それで、これはチャンスだと思って、それまでけっこう雑用が多かったんですけども、「学長、僕もホームランを打ちたいんです。ホームランを打ちたいので、もう外野の球拾いはさせないでください」と(笑)。そうしたら学長は絶句しちゃって、一本とられたみたいになって、それ以来雑用があまり来なくなったんですよ。

高橋 それはよかった(笑)。

原 裏を返せばけっこうこわいなと思ったんですよ。組合もないし、学長のさじ加減ひとつでもどうにでもなるところがあったので、できたら移りたいなと思っていた矢先に、竹中千春さんから連絡があって、福田歓一さんのポストが空いているので来る気はないか、と。

武者小路 ああ、そうか。

加藤 福田さんの代わりか。

勝俣 政治思想史？

高橋 福田さんも政治思想史か。後任なんですか？ 福田歓一さんの。

勝俣 今日、初めて思い出した。

高橋 知らなかった。

武者小路 やっぱり後任がよかったですね(笑)。

原 ありがとうございます。

高橋 半分公募というやつですね。

原 純粹の公募じゃないんだけど。

高橋 公募に出すけれども一本釣りするという。

原 詳しくは覚えておりません。

勝俣 結果としてよかったですね。

原 来る気はないかと言われたので、もちろんそれはあるというふうに戻事をして。

加藤 それで公募の中に入って……。だから公募なんですよ、一応。手続き上、そんなにおかしくない。

原 ただ実を言うと、ちょうど同じころ、関西学院大学社会学部でも似たような半分公募があり、採用通知がありました。しかしそちらは担当が産業社会学だった上、関西に移住しなければなら

いのでお断りしました。結果として関学には大変なご迷惑をおかけしてしまいました。明学から採用通知が来たことは、山梨学院にも伝えました。そうしたらまた学長から「うちの大学より偏差値の高い大学に行くなら許す」などと言われましてね(笑)。

それで移ったのが 2000 年で、その年の 11 月に『大正天皇』を出したんですよ。加藤さんはかなりそれを高くかっただけですけども……。

加藤 希代の名著。風当たりもけっこうあったからね。

原 そうしたら、山梨学院の学長から電話がかかってきたんです。これは怒られるかなと思っていたら、いきなり「礼を言うぞ」とか言うから何だと思ったら、要するに奥付に「山梨学院大学助教授を経て」と書いてくれた、と。

武者小路 ああ、なるほど。

高橋 いい人だ(笑)。

原 そうなんです。けっこういい人なんです。自分で言っているんですけども、「うちの大学じゃ朝日選書なんか出せるやつは誰もおらんからな」と(笑)。

加藤 すごく明るい話だね(笑)。

原 明るいんですよ。山梨学院大学でも会議はありましたが、ほとんど意味がない会議というか、要するに司会の人に「これで異議はありますか」と言われると、みんなで「異議なし」とか言っているだけ(笑)。議論がないわけじゃないですか。でもそこにいることが大事という、そういう大学に慣れていたので、やっぱりものすごいカルチャーショックだったのが教授会。

高橋 みんなカルチャーショックを受けるんだ(笑)。

原 最初の教授会でものすごいカルチャーショックを受けて。

高橋 どんなのでした？

原 とにかく長いでしょう。ものすごく長いし、ほとんど議論じゃなくて、だんだん個々のお喋りみたいになっていくというか……。ちなみに放送大学では 100 人近い教員が定時に集まり、長くても 1 時間半で会議が終わります。最初の教授会の

とき、あまりに短くて思わず一人でほくそ笑んでしまったほどです。

高橋 モノローグだよな。

武者小路 みんなのモノローグ (笑)。

原 それに対して、さっきの書記が回ってくるわけです。僕も 1 年目にやっぱりやりましたけれどもね。1 年目の確か後期かな、秋学期にやった。

加藤 その前は 1 年単位だったんだよ。

原 それで切れたんですね。いきなり 1 年目で切れて……。

高橋 モノローグはやめてくれ、と。

原 「いいかげんにしてくださいよ」とか「特急みたいに早く次にいってくださいよ」とか。

加藤 書記が？ 書記しやすいうように喋ってくれよ、と。

武者小路 ちょっと途中であれして申し訳ないんですけれども、明治学院大学国際学部の教授会がいろいろ問題があるということと同時に、いいところもあると私が感じたことがありまして、それだけ一応バランスをとるために申し上げますと、教授会の議論ではなく、もっと根本的な研究会を開いて議論すべきことだったと思うのですけれども、国際学部に在日コリアンの学生を入れるという時に、多文化的ないろいろなアイデンティティを持った学生が入るべきであるという提案に対して、誰だっけ、在日コリアンで日本名の……。

高橋 竹田青嗣さん。

武者小路 そうそう。彼が、これも非常に正しい議論ですけれども、在日コリアンの学生を入れるのはいいけれども、自分の民族意識を強く持った学生だけを入れるというのは差別である、と。確かに彼は日本名を使っているし、それに対して今度は、やっぱり在日コリアンの自覚を持って自己主張するような人を入れるべきである、と。

加藤 面接試験みたいなので入るケースね。

武者小路 両方の議論が対立して、結局どちらでもあり得る、民族意識がなくても入れるように……。

加藤 民族意識をもたないことにも在日コリアンとしての権利がある、という主張。(持参した冊子を手にも) これがその時につくった冊子ですね。こ

の時、この問題に立ち止まって、総合講座を自分でコーディネートして開きました。そしてそれを冊子にした。タイトルは、『総合講座「さまざまな差別」のために』。問題を提起したもとの竹田青嗣さんから始めて、伊藤るりさんとか、いろんな教師に入ってもらった。

勝俣 武者小路先生もいますよ。

武者小路 ああ、そうか。なるほど。まさに差別についての考え方を教授会でああいうふうにもみんなが熱心に議論できるというのは、かなりほかの教授会、それこそ東大法学部にもそんなのはあり得ないんじゃないかと思うんです。

原 2000 年に着任して以降の教授会で、そんなことを議論した記憶はないですね。

加藤 このころは、だいたいそういうふうなこともやりましたよ。エコロジー論議をめぐって、シュギ (主義) とシュミ (趣味) を混同するな、なんて僕が半量を入れたり。

高橋 本質的な議論もしていたんですね。

勝俣 いままで思い出したのは、教授会の論議というのは時々原則論になって、いろいろな意見が出て、いまでも憶えているのは、ある国際学部の教員が、確かアメリカの国防省か何かのお金で出張すると言ったので、その時に僕も都留先生も、軍事研究というのがいいかどうか、と。都留先生はそれはやっちゃいけないんだ、と。豊田先生なんて、役所からお金をもらっちゃいけない、ときわめて厳しかったです。僕も外務省の文化人派遣か何かでアフリカの大学に講演に行ったことがあるので、いわゆる研究者として絶対独立原則を守るといようなことではしかられてもおかしくなかった。

今、教授会で、出張する時のお金の出所にマルをつけるところがあるでしょう、どこからお金をもらっているか。初めはなかったんですよ。ある時そういう軍学共同の論議があって、恐らく国際学部が中心になって、全学の出張費用の出所を明示するようになったのかと思います……。たとえば国防省とかね。ただ、ある時からこうした原則を正面から論じなくなったようです。軍事政権が人権弾圧で国際的に広く批判されている時に日

本の学生を、引率する場合、これをどう考えるか。僕はそれはもっと議論になっていいと思い、「人権問題があるんじゃないか」と言ったけど、そういうふうには議論が盛り上がりなかった。

加藤 僕はあんまり専門じゃないからなかば通行人だったけれど、そういうふうなことも少しは問題にはなっていたね。あなたなんかそういうことを言っていたのを憶えてるよ。

勝俣 ありがとうございます。

高橋 確かに、そういうふうには深い議論があったということですね。

加藤 そういうのはけっこういろいろな人と教授会の席で、福田さんともやったし。

高橋 バトルになるわけですね。

加藤 福田さんとはバトルにはならないけれどもね。つまり「君、出て行け」みたいな(笑)。そういう発言はないんですけども、そういうことができたし、実際いろいろな形であったと思う。

一つ言うと、勝俣さんは憶えていると思うけれども、中国の天安門事件があって、「民主の女神」というのがあったでしょう、あれをやっている時に、あれと同じような変な人形の像を国際学部の学生でつくったんです。

高橋 戸塚でつくったんですね。

武者小路 そうそう。

高橋 それって、いつでしたっけ。

加藤 89年。

高橋 天安門事件の時ですね。確か残っていますね、映像が。

加藤 それをニュースステーションか何か取材に来たりなんかして、みんながけっこう盛り上がった時に、僕のゼミの学生が首を切ったんです。あの人形の首を切ってラウンジのところにテーブルを置いて、首を傍らに載せて、「いま学生たちが連帯を表明するというのは、向こうで生命をかけて闘っている人間への連帯の責任をどこまで引き受ける見通しがあってやっているのか。自分は疑問に思うところがあるのでこういうことをした。文句がある人は、明日までここにいるから言いに来てくれ」と。それで、勝俣さんも怒っちゃったわけ。

勝俣 僕は逆に怒ったのね。それを暴力的にやったということで、原状を復帰すべきだ、と。確かに首をとって、女神像の手の上に置いたわけですね。僕は学生たちがやったことを応援して、武者小路先生も確か 2000 円か何かカンパしていただいで。あれは僕が入って来て 2 年目の 89 年の 6 月ですね。テレビ朝日という局にたまたま僕のゼミ生がバイトでいて、彼女が上司にこのことを知らせていました。そしたらわざわざクルーが来て、「都内の大学」と言うけれども結局は横浜のキャンパスでしたが、「民主の女神」の除幕式がありました、とニュースステーションで流れました。

加藤 そう。撮っていったんだ。

勝俣 加藤さんと僕はイメージが違うかもしれないけれども、あの時の 1 期生はいまでもはっきりと憶えているわけね。あれを壊したということ自体は、僕は論議すればよかったけれども、原状回復しないまま——男子学生だったでしょう？

加藤 そう。それで、教授会で一度問題になって、そこで、いま言われたようなことを勝俣さんが発言して、僕は「この学生は僕のゼミの学生だ」と紹介して教授会の席で彼を擁護しました。その時はゼミでも、だいぶそのことで議論をしたの。前もって相談してくれればよかったが、まず、一人でやったわけよ。かなりしっかりした男で、いまは東京の某私大の職員をしている。とても力のある、腰の据わった学生でね。

勝俣 鶴見太郎さんが行ったところだ。

加藤 いや、ゼミが、もと鶴見太郎さんと一緒のところ。阿満さんのゼミにいて、阿満さんのゼミから僕のところに移ってきた。その時の理屈なんかも、すごく彼なりに深く考えたものだった。だから、両方の問題があるよね。教授会でも少しやりあった。けっこうそういうところは、いま考えると、僕もそのあと大学を変わったけれども、他にない明学の国際のすばらしいところだったかなあ。時間が長いとかそういう問題はあっても、そんな議論が僕と勝俣さんのあいだで交わされる、それを他のメンバーが聞いているなんていう教授会は、ほかにないんじゃないかなあ。

武者小路 そうそう。

*



「中間休憩時に勝侯が以前共同研究室ロッカーに保存していた私物カンパリが廃棄処分されずにキッチンコーナーに放置されていることを発見し、カンパリソーダにして参加者に供した。その結果、同僚の何人かが謝意を表した。(勝侯記)」

*

高橋 討議できたわけですね。

加藤 だって、いまこういうふうには元教師が集まって、こうやって駄弁ってるでしょう。でも大学の学部の 30 周年の座談会って、こういう話じゃないよ、普通 (笑)。

勝侯 それはそうだ。

加藤 とんでもない話でしょう、武者小路さんを前に、こんなため口きいて。

高橋 ほんとはですね。皆さんが明学に来られて、いろいろカルチャーショックがあった等々のお話をお聞きしました。ここからは、少し駆け足になるかもしれませんが、明学で教員として、一つは研究者として、もう一つは教育者として学生たちを教育するというので、過ごされてきたわけです。その間来られた時に教員として感じたことと、それから 5 年、10 年、その間にだいぶ学校も変わり、学生も変わりということを感じられたと思うんですね。実は今日一番お聞きしたかったことなんですが、もう辞められて別の大学に移られた方もいるし、まだ一応されている方も、教育からはリタイアされた方もいますが、明学で教えられてきた期間に特に変わっていったもの——国際学部ができたのが 86 年ですから、ちょうど日本社会が大きく変わる時期でもあったので、大学といえども外の風と無関係ではないということですね。変

わっていったことも含めて、明学で教えていた期間のことについて少しまとまってお話ししていただけるといいなと思います。

では、武者小路先生からお願いします。

武者小路 変わっていったかどうかよりも、明学で先生をしていたおかげで、より広いというか、割り切って申しますと、社会科学の中の政治学だけではなくて、政治学をやるためには、やはり周りの学問をやらなくてははいけない。私がいた間には福田さんがおられて、あとから原さんがいらっしやったので、それはとてもよかったと実は思ったのは、私は原さんがやっていたらしゃるようなところまで掘り下げられませんが、政治現象というのは文化現象の一つであって、単なる権力だけの問題、あるいは経済との関係で、政治経済の問題も大事ですけども、そうでない面の大事なことがあるということがかなりわかりました。

高橋 何年まで先生はいられたんですか。

武者小路 何年ですかね。私がフェリスに移ったのは、1998 年 3 月でした。

高橋 もちろん、原さんが来る前ですよ。

武者小路 ずいぶん前です。というのは、明学で教えて、それで定年になってフェリス女学院に移って、それから中部大学に移って、さらに大阪経済法科大学に移りました。定年になればやめるという制度に忠実に従いました。かなりそのあともいろいろ遍歴しているんですが、その中で、ここにいらっしやる加藤さんとの付き合いということも、一つとても、つまり戦後のねじれ現象とか、そういうことについては加藤さんとお付き合いしたことでいろいろなことがわかった、勉強になったということがあります。それから、実はあまり読んでいなかったんですが、前にもいったように阿満さんを通じて他力本願の仏教というものの持っているものについて最近になってかなり、水平社宣言のこととか田辺元の『懺悔道としての哲学』とか、結局親鸞聖人に戻らないとわからないようなことがいろいろ出てきて、阿満さんと付き合い合っていたおかげで、そういうことに目が向いた。そういうところが私にとってはとても大きかったということです。だけれどもそれは、あとから変

わったのではなくて、その流れが原さんという形でいうか、はっきり言ってしまう方がいいのかもしれませんが、福田さんの政治学から原さんの政治学が変わっていったということは、それだけ膨らみが出てきたということがありまして、とてもいい方向に行っているのではないかと。

高橋 なるほど。福田歓一から原武史というのは非常に象徴的な出来事だ、と。

武者小路 はい。別に福田さんに恨みを持っているわけではなくて(笑)、福田さんは福田さんなりに尊敬はしますけれども、ちょっと狭い。そのところが広がっていくのは大変よいことです。

加藤 「狭くて深い」という言い方があるけれども、「狭くて高い」んだよね(笑)。

武者小路 そういことですね。

高橋 じゃ、加藤さん。

加藤 僕は一つは、同じような形で答えていいのであれば、国際学部ができた時に、「国際学部」という学部の名前はこしかななくて、「国際学」という新しい学問を自分たちがつくるんだという意気込みが強くあった。そのための取り組みをだいたしたことを思い出します。政治、経済、文化という三分割も、90年代に入って東西冷戦が終わったと思ったら、湾岸戦争がはじまって新たに宗教、文明、文化というものが対立の要因にせりあがってきた。政治の下部構造が経済だとすると、さらにその基礎部分を文化がつくっているという三層構造が誰の目にも明らかになってきて、この学部のめざす国際学と時代の動きが並行していた。新しい学問が生まれるゾという感じをもっていました。

今回、当時の学部での刊行物を持ってきたんですが、たとえばこれ、「国際学の展望」というプロジェクトがあった。僕の発表の会の報告の冊子を持ってきたのですが、(『国際学部附属研究所プロジェクト 国際学の展望「小さな国際学・大きな国際学」』)これは司会を武者小路さんがしているんですよ。

高橋 これはいつつくったんですか？

加藤 96年。

高橋 10周年のときですね。

加藤 これをいま見ると、国際学部というのはどういうふうな学問かと、僕が発表しているんですが、よく頑張っているわけ。誰かが言い出しっぱにならないとダメだろうから、自分なる、弁慶みたいに矢面に立ち、たたき台を出すので、「みんな矢を自分に放ってくれ」とか言っている(笑)。群の態勢はこれでよいか、カリキュラムを群単位から変えよう、もっと横断的グループをつくれ、とか。よくこれだけ学部に尽くしていたなあと感心するんだけど、いま読んでもなかなか面白い。事実、可能性だってあった。だって、メンバーが、武者小路公秀と福田歓一でしょう。豊田利幸でしょう。坂本義和でしょう。

高橋 それに、多田道太郎さんに都留重人さん。

加藤 あと、なだいなだもいた。

高橋 なだいなださんもいらっしやっただ。でも、ちょっとだけですね。

加藤 なださんは、着任した最初の時に教授会に出て重大発言をして、それがスルーされたんで、今度は、自分が教授会を徹底的にスルーして最後、足が痛いと言って辞めた。

武者小路 そうそう。

加藤 最初の教授会で、手を上げて、「就職活動が大学の教育を破壊している現状に大学人は声を上げて、この現状に抗議し、大学の教育を阻害しない形での就職活動に限定するよう産業界、社会全体に申し入れをしなきゃだめだと思んですが、誰か賛成してもらえませんか」と発言した。でも、みんなスルーしたんだね。そんなことできるわけじゃないじゃないかと考えて。そうしたら次回から、教授会と同じ時間帯にゼミを開設して、以後、教授会には一切出なかった(笑)。それで2年間いて、2年目か3年目に「最近足が痛いので、あの山には登れない」と言って辞めたんです。

勝俣 そうですか。足は大丈夫に見えました。着任したての頃、彼と一緒にキャンパス内で8号館を目ざそうと迷ってしまった時、彼はすごい、こんな底の厚い登山靴みたいなのははいておられました(笑)。

加藤 なださんがいて、阿満さんがいたでしょ

う？ あと、なださんの後任として竹田青嗣さんが来た。続けて辻信一こと大岩圭之助さん、大木昌さんも入ってきたしね。ほかにもいろいろな人がいた。

高橋 非常に個性的だった。

加藤 パリから来たての山根裕子さんなんか、経済が専門で、ジャック・アタリの近くで働いていたと思うけど、来てすぐ、クンデラはどう思う？と事務室で聞かれて面食らった。けっこういろいろな話ができる面白い人がたくさんいて、そういう中から何かちょっと新しい学問が生まれるんじゃないか、という気運があったと思います。沖縄研究、高度成長研究、あと中国にも韓国にも行った。だから、このときの発表でも、いろいろと生意気なことを言ってます。たとえば「学際」といっても、いろいろな専門家が集まっただけでは「学際」なんてできないので、一人ひとりの中に「学際」的な好奇心の境界横断が生きられていないと難しい、とか、学際性から学問をつくるには、「際（きわ）が大事」で、その「際」というのは「際物」と言うようにすごく胡散臭いものなんだ、だから胡散臭いものを喜ぶような寛容な精神が必要だとか。けっこう新鮮、久しぶりに見ると。

高橋 それが、20年前ですね。

加藤 そしてこの僕の話最後に司会の武者小路さんがまとめているわけ。こうですね、と。そうしたら僕が、「いやいや、僕が言おうとしているのはそういうことじゃありません。だから、いまのお考えとは違うと思います」と文句をつけている。すると武者小路さんが慌てず、騒がず、「そうですか。違ったほうがいいと思います。違って安心しました」と返しているんだよ（笑）。

武者小路 すいません（笑）。

勝俣 それが国際だな。

高橋 国際学部っぽいですね（笑）。

加藤 あと、その少し前だけど、湾岸戦争が起こったでしょう。それで学生がすごく不安になったんですよね。あの時。

高橋 91年ですね。

加藤 そのときの時代の変化が忘れられないですね。学生がいつせいに不安になって真面目になっ

て政治のことなどいろいろものを考えるようになった。片方で先生方は、まじめな教員が多かったから、深刻そうに「世界のこと、社会のことを考えろ」と言っていた。そういうふうな真面目になる仕方だと痩せるからダメだ、なんて僕は言っていて、バブルの時代ですから、いままで通り遊んでいろよ、なんて学生にうそぶいていたのですが、そしたら、ある日、学生から、「先生の頃は学生運動があつてよかったですね、でも僕らには何にもない」と言われてショックを受けた。それからですね、僕が政治づいて、変わったのは、90年代のなかばあたりからは『敗戦後論』なんかを書いてひどく批判もされていたなか、授業を続けていると外部からいろいろな人が教室に紛れ込んで来た。一方ではすごく活力があるような時期でした。僕自身が、明学国際と学生たちに育ててもらったというところがある。

だから、今回 SEALDs の運動が明学を出生地の一つとして出てきて、とりわけ明学の国際から奥田（愛基）くんとかああいう人士が出てきたでしょう。僕は、これまでの30年の国際の土壌があつて、こういうことが起こったんだって、本当に信じているんです。これまでのことを知っているから。高橋さん、原さん、高原（孝生）さんとみんな違うけれど、それぞれのなかにやはり明学国際のDNAが生きている。たまたま原さんが辞められる時の最後の一連の講義のうち、その1回に呼んでいただいた。そこで国際学部の来歴の話なんかをちょっと原さんと一緒にしたら、そこに奥田くんが来ていて、彼の発言を聞きました。そのあとの懇親会で2時間くらい話したけれど、僕はなかなかこの人はいいと思った。非常に評価が高いんだけど、初めて会ったという気がしなかった。そういう人間がある日、ぼっと1日で出て来るわけではないという気がするんですね。やっぱり、明学の国際は、というか明学は、80年代の後半から、こういうことを続け、89年には天皇代替わりの自粛に抗議し、いろんな人が頑張つてやってきた。その延長に SEALDs がある。その流れが、僕のなかではだいたい自分の経験と重なって、大きいですね。

僕なんかがいまもこんなふうに武者小路さんのため口でやりとりしている。でもふつう、こういう場所はないです。それは、ここを離れたあと、誰もがみんな思うことだと思う。あの頃、僕たちは、教授会で、また「スターウォーズかよ」なんて陰口をきいていたわけだけど。

高橋 神々の戦いですよね（笑）。

武者小路 そうなんです。

加藤 あと、学恩ということも思います。僕は去年、『戦後入門』という本を書いたんですが、そこで1年間、いろんな勉強をし直したなかで、豊田利幸さんのものと坂本義和さんのものをもう1回読む機会があった。90年代の末に『戦後の思考』というものを書いたときにはルソー、マルクスに関して、福田歓一さんの著作と都留さんの本に学ばせてもらいました。また国連のことでは武者小路さんからそこでの活動の肩幅のようなものを教えられたと思います。それらのものを書いた人たちを直になま身で知っているっていうこと。その警戒に接したということが、そこでの理解を非常に安定した、人間的なものにしてくれている。それが本当に幸運だったと思うんです。

武者小路 一つ、言いたいのではなくて、質問がしたいのですけれども、一応私も反動というか一番悪いキリスト教のローマカトリック教徒でして、上智で先に教えて、それで明学に来て、実は明学に来てキリスト教というのはなかなか面白いところがあるということがわかったんです。けれども、キリスト教というものをもとにして、しかしリベラルに、別にキリスト教じゃなくちゃいけないとは言わない、けれどもキリスト教の一つの立場をとっている。上智には全然それがないわけです。要するにカトリックというのはあんまりインテリがいなかったの、初めから上智大学というのはキリスト教徒じゃないとあれになれないキリスト教・コードというのがなくて全然普通の大学だったので、ここ明治学院大学に来て初めてキリスト教大学だなあという感じがした。キリスト教大学と国際学部とは、どう関係があるのか。ないのかもしれないけれども、そこどころがどうなんだろうかという質問です。将来、日記

とか公私の文書がでてくるとはつきりしますが、森井先生は、いろいろ他のキリスト教関係大学の先生方と共同声明を出すことをはじめられたとおもいます。天皇の再神格化などのような問題にはキリスト教知識人として、いろいろな流れがあるとしても、そのなかには、森井先生もはいつている南原繁東大総長の流れが一番重要です。その流れの中には福田先生もはいつておられたし、坂本さんも、直接南原先生に師事したキリスト者だったのです。

加藤 坂本さんもクリスチャン？

勝俣 坂本さんはプロテスタント。

武者小路 そうなんです。それは国際学部の中で意味があるのかなのか。キリスト教大学であるということ、キリスト教大学においてリベラルに議論ができるような場所があるというのも面白い。

高橋 面白いですよ。

武者小路 なぜそうなのかというのは、実はよくわからない。

加藤 僕は、キリスト教みたいなものが一つこの場所にあることで、ものを考えるうえで、帯電現象が起こるといふか、よい刺激があったと思っていますね。スタンダードがあるので、そこと違う場所に立つことの意味がくつきりとわかる、といふか。僕はここで、阿満さんを通じて、本居宣長とか荻生徂徠とかを教えられた。近代天皇制研究会といふのを組織して、江戸期の思想を勉強させてもらったんです。柳田國男もそうです。ここがキリスト教の大学だったことがよかった。それで、かえってそういうところにしっかりと関心が向かったし、またキリスト教の勉強も自分なりにできたと思う。親鸞とか法然とか、一方で、ブルーゲルとかグリューネヴァルトとか。いまでもその双方への関心が続いていますけれどもね。

だから、ここがキリスト教の場ということとは、すごくいいことなんです。人の生き死にに触れるセンスが生きている。人の処刑された像がチャペルの奥に鎮座しているんだから、ものを考えるのに悪いわけではないんです。

武者小路 なるほど。

加藤 昭和天皇が死んで何か文章を書いた時、たぶん日学同（日本学生同盟）だと思うけれども 2、3 週間ずっと無言電話があったし、最後に赤報隊からも脅迫が来て、お巡りさんに来てもらった。でもそれは僕が明学の教師だったからで、あの時は明学全体が右翼のターゲットになっていたんですね。森井さんが先頭に立って頑張ったので。

武者小路 そうそう。

加藤 だから、日本のなかでキリスト教につながるということの感じも少しはわかる。あのとき、森井さんが頑張ったでしょう？ 自分もちよっと似たような目に遭って、森井さんがどんなに孤独かよくわかりました。つまり、本当に親身に心配してくれる人なんていないんだよね。家族しかいない。みんなパツといなくなる。新聞記者とかね。
高橋 武者小路先生がおっしゃったことで考えちゃうんですけども、キリスト教がネイティブなヨーロッパの国だと信仰になるけれども、たぶん日本だと、いつまでもキリスト教の信仰というものとは他者のものであって、受けとるとしたら思想にしかならない。だから明学は思想がバックボーンの大学ということなんですね。一応。しかもそれは、信じるということではなくて、こういう思想があるよと言って、その上に……。

加藤 ちょっと社会から浮いているんです。なじまない。

武者小路 そうそう。しかし、それが日本における宗教思想のいいところですよ。キリシタンのミサが茶道のしぐさだけでなく、ミサの本来の意味、キリストと一体化するためにパンとワインと共に飲食することを日本的に脱宗教化した。それはそれでキリスト教の布教よりよかったと思います。

高橋 逆に、たとえば、チャペルに何百人か学生がいても信者はたぶん一人もいないというあり方が、面白いところですよ。

武者小路 そういうことですね。なるほど。それがしかし遠藤周作の『沈黙』の思想として、かえってキリスト教的だというパラドックスがあると思います。

高橋 かといつて、それは無にできない。

加藤 そう。力を発揮している。

高橋 つまり歴史と重量感を持っているものがあるって、それが横に存在している。ある意味で監視しているというか、見られている感じがあるんじゃないですかね。

加藤 そう。見られているという感じがある。

高橋 これは独特の、うちの大学のあり方なのかもしれないですね。

じゃ、勝俣さん。

勝俣 その前に一つだけ補足説明。例の首ね、あれは僕が自宅に預かっているんですよ。うちの家族にも、あれはいずれ僕が、かの国で民が再び立ち上がった時、天安門広場に外部からお客様としてあれを持って行こうと思っているんです。

加藤 それはいいね。

勝俣 あのころ日本にはこういう学生や教員がいました、という意味で。首のところだけ残っていますから。

加藤 それは首を切った男に伝えておく。

勝俣 はい。言っておいてください。僕は彼と一回取っ組み合いになりそうになった時、加藤さんが真ん中で、8号館のエレベーターで「まあまあ……」と。僕は非暴力の平和主義者ですから。

加藤 彼も平和主義者なんだ。

勝俣 外の世界と大学は無関係に存在しないと言うけれども、僕は少なくとも、国際に来て結局 26 年間なんですけれども、ゼミ生に 1 回も僕のところに来ると就職がうまくいくということは言ったことがないですよ。来たい人は来て、と。自分はまだ未熟かもしれないけれども教え伝えたいことを教えます、それだけだ、と。だから、そのあと 10 年後か 100 年後か知りませんが、何かの役に立てばいいというぐらいで。

僕がいま一番懸念するのは、カリキュラムの話がさっき出ましたけれども、いまはアダプトするという……。初めのころというのは、80 年代はアダプトするということがあまりなかった。僕も全学の就職委員をやったけれども、ちょっと別のところに国際は位置していたんですよ。それで僕がある時から考え出したのは、世界にというか、現状に適応することばかり考えたら一体どうやって世間を変える人が出るの？ と。それは僕らが

変えられなくても、若い世代が学部で学ぶいろいろな思考のツールで変える、それを使って世界と自分を考えるところが大学だろうと思ったから。その意味では僕はこれから、この大学のパンフレットか何かに「真理はあなたを自由にする」とあるし、それしか僕はないと思っています。日本の国内でマイノリティの大学になるかもしれないけれども、それでも国際はいいと思っています。むしろそこで小規模でも孤高に光ってほしいと思うわけね。

僕は経済がもともと専門で、開発経済学、応用経済学です。国際に入って僕はすごくよかったなと思ったのは、まさに政治・法学系、経済学系、人文科学系の3つの群からなっていて、群が違う人間同士と一緒に30人体制で回ってきたわけですね。だから、ある意味では経済学というのは、都留先生は経済学説史をちゃんと教えられる先生だったわけですね。歴史というのいろいろな別の先生、それで僕がこれからコクサイって一体どんな方向に向かうのか気になり始めた時から『国際学』入門おススメ6冊——ボクのセンセイ、コクサイ：国際学部1990年代——（『国際学研究』第41号掲載 <http://repository.meijigakuin.ac.jp/dspace/handle/10723/1139>）というのを書いて、6冊の学生に読んでほしい本を紹介してみました。まず武者小路先生の『人間安全保障論序説——グローバル・ファシズムに抗して』、それから福田先生の、ちょっと彼がアフリカにも触れている現在の民族問題という、京大のほうの民族でぼくも知っている研究者とも一緒に書いている『国家・民族・権力——現代における自由を求めて』という、これには部族も入るんです。それから森井さんは学問の自由についての『精神と自由』という薄い本だったんですね。玉野井先生は例のポランニーをかみ砕いた、学陽書房で出されている『等身大の生活世界』。豊田先生は中央公論社で出している『世界の名著 ガリレオ』というのがある、ガリレオの文章よりも彼の解説のほうが長いんですね。すごいやつで、彼はイタリア語が読めますからね。最後に都留先生のポリティカル・エコノミー、『市場には心がない——成長なくて改革をこ

そ』といういまでも通用する、そういうのを学生に読んでほしいと思って、いまは図書館がちゃんとPDF化して閲覧できるようになっているんです。明治学院大学機関リポジトリが。（明治学院大学機関リポジトリ：<http://repository.meijigakuin.ac.jp/dspace/>）

その意味では僕はすごくよかったのは、経済学部に行ったら小賢しい、いまはやりの経済学を追いかけていたかもしれないんですね。いまでも憶えているのは、高橋さんはいらっしやったかな、教授会で学部長が、「今日、ちょっと皆さんに審議してほしい。それは戸塚の横浜キャンパスで遺伝子組み換えの実験をする。それはいわゆる生物多様性条約に抵触しうるので教授会の許可が要る」と学部長が言い出したわけね。

高橋 あったね、そんなこと。

勝俣 「えっ、なぜ？」と言うと、白衣を着た先生が「これは安全だから大丈夫だ」とよく聞いたら、クラゲの実験を1年生か2年でやらせるというんですよ。遺伝子組み換えをね。それで僕は、「ちょっとおかしいんじゃないか」と言ったわけですよ。大木先生も、「そんなにやりたかったらビデオでいいんだ。別に文科系の学生に実験をやらせる必要はない」と。僕は、安全だと言った先生に、廃棄する実験のあとの水を安全ボックスに入れるというから、「安全だと言うんだったら『ボックス』だけでいいじゃないか。なぜ『安全』と敢えてつける必要があるのか」とか言っているうちに、やや気まずい空気になっちゃったわけです。それで結局学部長が、もうおさまらないということで、次回審議する、と。それで僕は、その間同僚に、やっぱりこれはおかしいから、まさに821教室で、次の週の何かの時に会いましょうと言ったんです。そうしたら柴田さんというキリスト神学の哲学の先生が、あまり教授会に来られない先生なんですけど……。

加藤 柴田有さん。

勝俣 そう。彼はヘブライ語もラテン語も両方読める方なんですけれども、彼が来ているわけですよ。あとは大木先生、それからスローをやっている大岩さん、みんな来ている。僕は柴田先生に、

「あなたはなぜ、キャンパスであまり見かけない先生なのに、来たんですか？」と言ったら、「勝俣さん、遺伝子組み換えをやられたらクローン人間ができるかもしれない。そうすると人間の定義が崩れるかもしれない。そうしたら僕の持っている哲学系の講座がなくなるかもしれない」と（笑）。その時に彼が言った「人間の定義がなくなる」というのが、ものすごい言葉だと思ってね。こういう先生とチラッと会って、お話すると、そういう先生は僕に説明してくれるわけですね。1 回、「pathos」というのを「情念」と訳すのと「苦渋」と訳すのと二つあると言ったら、すぐ彼は「全くそうだ」と。パトスというのはギリシャ語でどうのこうのと、それを戸塚の駅から 8 号館の前まで着くバスの中でパッと解説してくれる。そういう同僚。僕が国際に来て一番よかったのは、自分以外の領域、ディシプリンの人間に身近に会えたことです。学生にも様々な分野の先生をうんと利用しろ、と。たとえば、僕は政治学と経済学はどこが違うかと本当に勉強になりましたね。

あと文学ですね。加藤さんは群は潰せと言うけれども、僕はある意味で群をちゃんとやらないと、とんでもない人事が……。いま経済学は社会科学としてかなり危なっかしい方向に進んでいるんですよ。たとえば僕たちがお金を使うたびに収集されるビッグデータを利用する完全な心理学系マーケティング手法が唯一の経済学のこれからみたいな。

加藤 僕もいまだったら、群はあって、その上で別の形の交流みたいなことがあるというほうがいいと思う。でないといまは何もかもなくなっちゃう。いま潰したら。

勝俣 そうそう。僕は学説史は教えなければいけないと思っているのね。社会科学でも社会思想史でもいいですよ。そういう歴史研究というのは、本当に国際学部に来たおかげで、僕みたいなど素人がいろいろな質問をしても大先生が答えてくれる。都留先生にも聞いたことがあります。先生に「社会主義と資本主義、どっちがいいんですか」と言ったら、「それはミックスだ」と。混合経済だ、と。いまはあんまり使わないけれどもね。そうい

う大先生に囲まれながら、僕は 26 年間、何人もの同僚に助けられてなんとか生き延びましたけれども、いさせてくれた知的な財産は、明学の学生も当然その恩恵というか、誰が変えるかというのを考えさせる人間をつくるという意味では、すごい贅沢なカリキュラムだと思います。

加藤 いろいろな人がいて、いまここに『国際学研究』の創刊号を持って来ているけれども、これは編集長が、都留さんなんです。それで若い編集委員のメンバーが田部（昇）さんと僕と伊藤りさんで、三人がその下で動いたんです。最初の編集に関する教授会で、まず都留さんが言ったのは、紀要というのは誰も読まないですって。「二人しか読者はいません」と。書いた人間とあと一人か二人で誰も読まない。こんなものを出すのは意味がない。出すのだったら、最初からこれを岩波に刊行させると言ったんです。国際学というのはまだ存在してないんだから、これをしっかりやって岩波で出版させましょう、と。それは結局、実現しなかった。でも、新しい学問をつくるということに関してかなり、本気だった。その頃の、気迫というか……。

高橋 気迫ね。

勝俣 確かに。僕がそのあとの編集委員会に行ったら、都留先生が『リヴァイアサン』の邦訳の書評を誰がやるか」と。僕は意味がわからなかったのね。そうしたら「政治思想史の原点だ」とか言って。その時、柴田さんも委員としていらっしかったです。

高橋 じゃ、原さんお願いします。原さんは、かなりあとになって入られて、2016 年 3 月までですね。

原 そうですね。着任して最初の 5 年ぐらいというのは、教授会が長いという不満を除けば、けっこう快適だったんですよ。それはなぜかということ、あのころは阿満さんとか加藤さんがもちろんおられて、そういう人たちが私のような若手教員の研究を支援しようという空気が明らかに存在していました。

加藤 勉強会をしていたの、阿満さんとこの人と。

原 それは非常に精神的にも気持ちよかったです

うか、教員としてのノルマとかはもちろんあるんだけど、それ以外の時間をなるべく研究に使えという、そういう空気が明らかに存在していたと私は思います。

ところが、そういう先生がだんだん抜けていったわけですよ。阿満さんとか加藤さんとか竹田さんとか、あるいは採用のときに面接していただいた浅井基文さんとか。ああいう人たちが抜けていって、もちろん補充して若手を採るんだけど、その若手もわりと従順というか、言われたことを淡々とこなすというか、あまり研究をするということに……。情熱は持っているのかもしれないけれども、何となくそれに対して不満もないし、だんだん学部全体の空気というのが、会議ももちろん増えていったし、研究をお互いに尊重しあおうみたいな空気が明らかにそのあと薄れていった。それは非常に私にとっては居心地の悪いものになっていって、途中から私は附属研の所長を二期つとめたんだけど、結局なんであんなことを始めたかというのも……。

高橋 公開セミナーですね。

原 つまり、国際学部が、すごく閉鎖的になって内向きになっているという不満があって、それを外から突き破るといふか、いろいろな人を呼んできて、一般の市民なんかも加わるといふか、そういう開かれたところでちゃんとメッセージが発信できなければだめでしょう、と。大学というのは別に大学だけで完結しているわけではなくて、常に社会の中で我々のやっていることは見られているわけだから、そういう意識を持たないとだめでしょう、と。そのためには思い切ってラディカルなことをやるしかないと思って始めたわけです。

あれ自体が、もちろんすごく大変でしたし、すごい時間をとられたけれども、やっぱりああいうことをやることで逆に自分自身の研究に対する意欲も刺激されるわけじゃないですか。いろいろな人と話をすることで、こういう人たちに対してもちゃんと自分の研究というものをわからせるというんですか、あるいはそれを評価されるということじゃないと、やっぱりだめだろうという気持ちになって、所長をつとめた 2008 年から 2012 年の

間に自分自身の研究が刺激されているという面もあった。

2012 年で所長を辞めて、そのあとがサバティカルで 1 年あったんですけども、帰って来たあとの 2 年がつかったですね。1 年行かなくて、帰って来たらもっと悪くなっているといふか、さっき言ったような傾向がより甚だしくなっている気がしたし、その時に 1 年生の現代史を持たされて、全員必修の 260 人がとる授業をやらされてかなり愕然とした。たとえば、「さきの大戦で日本はどの国と戦いましたか」みたいな問題を出すと、「韓国と北朝鮮」と（笑）。本当ですよ。これは冗談じゃないですよ。

高橋 そうみたいですね。

原 愕然としたんですよ。

高橋 アメリカと戦っていたの知らないんだ。

原 そう。全然知らないとか、答えられないとか。つまり、これだと大学の授業はできないわけじゃないですか。高校どころでもないですね。ひょっとしたら日能研とかのほうがもっとレベルが高いんじゃないか。

勝俣 ジゴケン？

原 日能研という中学受験の塾ですよ。そういうところのほうがまだいい授業をやっているんじゃないかという気がして。

あと、いまと関連して思うけれども、入試のあり方もそうなんですね。よく日能研とかが車内に出しているでしょう。中学入試の問題とか。社会の問題を見ると本当に愕然とする。全然いい問題ですよ。いまだき、短答式じゃなくて、もっと考えさせるいい問題をつくっているんですよ。いい中学というのは。一方、自分が出している問題は全部教科書のまんま。着任以来十何年ずっと日本史の問題をつくらされましたけれども、それだって全部教科書のまんまの問題しかつくれないんですよ。それは要するにほかの人が採点できないからです。そのつまらない問題をずっとつくり続けた。自分自身はこういう学生に来てもらいたいとか本当に考えますけれども、こんな入試をやり続けている限りは、たぶん無理です。

加藤 入試を変えたら違う学生を入れることは可

能だね。

原 そうですね。

加藤 ほかの大学もみんなそういうことをやったら、またこのやり方も埋もれるだろうけれども。

勝俣 僕は全部 AO 入試でいいと思う。大岩さんもおそらくそう思っている。

加藤 本当に、ここいらで何か考えないといけない……。

勝俣 本当に面白い人が来ればいい。学びにやたらに好奇心のある人が。

原 要するに、いま、ほかの学部の試験も全部やらなければいけないという決まりになっているじゃないですか。これをやめて国際学部だけだったら、本当に責任をもって日本史の問題をつくりますよ。もっと面白い問題をつくりますよ。そうはなっていないわけでしょう。だから、いろいろな不満がだんだん高まって行って、ついに辞めてしまったということです。

高橋 今回僕は基本的に発言しないという前提でやっているんですが、もったいないからちょっとだけ喋っていいですか (笑)。

勝俣 聞きたいですよ、僕は逆に。

高橋 僕も 2005 年から教えているんですが、そもそも大学で教えたことがないどころか大学の授業も受けていないということなので (笑)、大学という場所がどんどこか知りませんでした。僕は大学に 8 年在籍して 4 回しか授業に出ていないので (笑)「大学って何をやるところなの？」と思って見てきて、非常にフレッシュな気持ちで発見とショックがいろいろありました。

一つは、最初のころはなかなか教授会も面白くて、議論があった。だんだん正直言ってつまらなくなってきたし、同時に、教育のシステムもどんどん変わっていった。そもそも何が標準か知らなかったのが、変わっていくのも、これはどういう原則で変わっていくのかなと思いつながりながら見ていると、正直言って「これが教育かな」というようなものに変質してきたように思います。簡単に言うと、外部の社会のニーズに合わせて学生を製造する工場みたいに少しずつなっていた。僕が学生だったらいやだなというのが正直な……。

勝俣 僕だってそうですよ。

高橋 ずっとお話を聞いていると、最初に国際学部ができた時のマインドとはずいぶん遠くになってきてしまったな、という感じがします。僕は、自分が研究者ではないので、一応作家で学生と向き合うことが多いので、そもそもいま教えていることは学生のためになっているのかいな、と思うわけですね。彼らが生きる時の助けるすべになるのかというと、本当に、先生方は個人的にはいろいろ思いを持って頑張っていってほしいと思いますが、このシステムの中で学生に向かい合うのはなかなか難しい。こういう授業をやって、こういう時間配分でやって、こういう入試をやって——内緒ですが (笑) 僕も国語の入試問題を十何年つくっているんです。2005 年から。

加藤 その前は僕もやっていた。

高橋 毎年もめるんですけど、僕は全部記述式にして書かせればいい、と言うんです。すると、採点できないと言われるんですね。でも、採点が難しいって、その先生の好きなように採点すればいいと言っても、それはだめだと言われる。実際に AO 入試なんかで、ただ一つの問題について書かせるだけ、っていう問題をつくるんですが、別に採点は困らない。だから、そうすればいいのに、これができない。好きなことを 4000 字書きなさいとか、裏表全部使っていていいというふうにすれば、もうちょっと違った子が来ると思うんですね。

加藤 採点できないと言うじゃない。でも、いま、それでもいいから採点させろと言ったんでしょう？ それは名案だと思えますよ。そうしたら先生が変わる。

高橋 そうそう。採点しなきゃいけないとなるとね。

加藤 僕は自信ありますよ。だって、それを商売でやってきているから。だけれども、これを採点できないと言う人がたくさんいるのはよくわかる。大学の先生と違って、ものを書くのが苦手な人もいる。そういう人が多いくらい。だから、自信がないからできない、そういうのはだめだというふうに答える人が 6 割、7 割いるのはわかるよ。で、そこから始めたら、最初みんなバラバラ

でしょう。基準がバラバラ。でも、バラバラだっ
ていいじゃないですか。いろいろな人が来たって。
短答式の点数でやったって、よい学生をそんなに
ピックアップできない現状を受けての対策なんだ
から。歩留まりが悪いことの中身が違うだけだか
らね。でも、この挑戦をやれば3年くらい続けて
いるうちに、先生が変わると思う。ちゃんと採点
できるようになってくる、だんだんだんだん。

高橋 いいと思いますね。先生の教育になる(笑)。

加藤 そう。そうしたら先生が変わる。そうす
ると本当に先生もやる気になるし。

武者小路 そうそう。

加藤 そうじゃなかったら、変わらないと思う。

高橋 というふうみんな言っていた、というこ
とです(笑)。

そろそろ最後のお話をさせていただきたいので
すけれども、いまのお話とかかわりがあるのですが、
皆さん明学を辞められて、まだ教員を続けておら
れる先生もいらっしゃいますが、一度は明学を含
めて教育の場、大学の場にいたわけですね。こ
の国の大学も形をどんどん変えている。大学だけ
ではなくて教育そのものがというか、社会その
ものが変わっていつているのですが、それがいい方
向に行っているとはとても言えないと思います。
その中であって、一つは我々に何ができるかとい
うこと。それから、これは国際学部の論叢『国際
学研究』に出すものなので、国際学部が創立から
30年経って、これからの国際学部に、ただ単に「頑
張れよ」じゃなくて、こういう時代の中にこうい
うふうにしていったらいいんじゃないかというこ
とを、元教員として最後に少しお話ししたきた
いと思います。武者小路先生から。メッセージで
すね、これからの国際学部への。

武者小路 変なメッセージを出します。実は一昨
日、鶴見和子さんの没後10年の山百合忌というの
に出してきました。去年俊輔さんも亡くなって、俊
輔さんと和子さんの思い出のいろいろな話があっ
て、その中で、俊輔さんが言われたことで私はこ
れからの大学の問題の一番基本的なことを俊輔さ
んが言っていたので、それを紹介して、教育の中
心に大前田英五郎をクローズアップする必要があ

るということを痛感したことを申し上げます。

鶴見俊輔さんが非常に面白いことを言っていま
して、ちょっといまど忘れしましたがけれども関東
に住んでおられる俳人の方がいまして、その人に
鶴見俊輔さんが、関東のヤクザで二人有名な人が
いる、と。実はそうじゃないんじゃないかと思
いますが。国定忠治と、国定忠治が張り合った大前
田英五郎がいる。それで鶴見俊輔さんは、自分は
国定忠治みたいな暴力的なヤクザは嫌いだ、と。
大前田英五郎のほうは一回も喧嘩をしたことがな
い。それでいろいろな喧嘩を鎮める立場の親分
だった。残念ながら日本人は大前田英五郎は嫌
いで国定忠治が好きだ。実は私は、いま日本が国定
忠治的な日本——安倍さんという国定忠治と同じ
ように派手に立ち回る、そういう日本にいま変わ
ろうとしていて、やっぱり鶴見俊輔さんが言った
ように大前田英五郎的な日本人が出てくる必要が
ある。非暴力で、暴力を使わないで喧嘩をやめさ
せる。実は日本の平和的生存権というのは結局そ
ういう大前田英五郎の話をしているだけのこと
で、つまり大学教育というのは、派手な立ち回り
をするような、要するに国定忠治みたいな人をつ
くるところがどうもあるのではないだろうか。つ
まり、注目されればそれだけ出世できる。だけれ
ども本当は注目すべきものは、そういうことでは
なくて、徹底的に非暴力ということ、非暴力と
いう屁理屈をつけなくて自然にそれをやるような
太っ腹な人間をつくるのが一番大事なんじゃない
だろうかという、変な提案をいたします。

高橋 なるほど。いまはみんな気が短くなってい
ますからね。社会全体が。

武者小路 そうじゃないかと思うんです。

高橋 では、加藤さん。

加藤 いまの話を受けて言うと、3・11のあとあた
りで安倍政権が出てきた時に、僕は「何ばかなこ
とを言っているの」と思ったんです。軽く見てい
た。アベノミクスなんていうのもすぐメッキがは
がれるだろうし、いまはしょうがないが、何年か
経てばみんなこれはダメだとわかるだろう、と。
その時の「みんな」というのは、社会のマジョリ
ティということです。ですから自分は一応まとも

な人間で、しかもその自分は社会のマジョリティだと思っていたんです。しかし、この判断は間違っていたと思います。この間、参院選の時にテレビをたまたま見ていたら若い人が出てきて、「三分の二って何だと思えますか？」と聞かれたら、「地球の中で海の部分が三分の二」と答えて、「へへへ」と笑っていた。いつの間にか社会は変わったと見た方がよいと思いました。

ですから、これからは学生に、少数者として生きていくすべを身につけてもらいたい。そういう教育の場としても生き残る前例となるんだということを、国際学部として、違う十何年か後の将来に向けて、めざしてほしいと思っています。この学部は、大きく方針を展開するというのであれば、今後、どちらかといえば孤立するでしょう。でも、だからといって時代に迎合したら埋没し、消えるだけだろうと思う。ですから、この道を歩み続けてほしい。そしてそこで、学生が、孤立しつつも、ゆったりものを考えるすべを学べるようであることを希望したい。これはけっこう難しいことだよ。マジョリティのなかにマジョリティの一員として生きて、しかもマイノリティの気持ち失わずにいるということですから。

生きていくうちには、たまたま天気が晴れたり曇ったりする。そのようにマジョリティがマイノリティになることもあります。だけれども、その曇りの日にもちゃんと日の光を感じて生きていく、その向日性の元気を身につけて卒業してほしいと思います。そういう伝統がこの学部の基礎にはあるし、この明学の基礎にもあると思うので。

高橋 本当にね。

加藤 僕は二年前に教育を離れたでしょう。28年教えたんだけど、大学に結局なつかなかったんです。つまり僕の研究室なんて、きれいにすればいいだろうに、いつも汚なかった。ゴチャゴチャで。辞めた時に全部整理して思ったわけ。「こんなにきれいになるのか」と(笑)。最初からこんなにやっていたら、どんなに居心地よかったかと思うんだけど。要するに大学を離れてホッとした。でも、僕にとっては大学で28年間過ごしたということがすごい大きなことだった。若い人につきあ

えたし、何人か、すぐれた人にも出会うことができた。大学というのは大なる可能性の場なのですね。だから学生にとっても、そうであってほしい。

高橋 そうですね。

加藤 この学部を辞めた人間のなかに、そういう形で、こういう残像が残っている(笑)。

高橋 美しい映像が残っている(笑)。

加藤 はい。

高橋 じゃ、勝俣さん。

勝俣 いまのと全部つながってしまって、あんまり言うことはないんですけども、原さんが言っているように、確かに90年代はどんな話でも、大先生とでも討論できたんですよ。ある時から国際学部の中で同僚同士が自分の業界の話をあんまりしなくなって、人事とか事故対策とか(笑)、そういうことにすごく忙しくなって、いい意味での教養の雰囲気は正面に出なくなったというのを僕はちょっと感じて、もしこれから国際がもっともっと面白くなるためには、やはり教員のディシプリンを超えた、「人間て、なぜ生きるんですか」とか、そういうのを学問的に問えるような知的文化を残してほしいです。学生は見ているわけですよ。あの先生とあの先生はこう意見が違う、と。僕がいつも学生に、僕のゼミだけではなくて、こんな贅沢なカリキュラム授業はないから専門領域以外のほかの授業にもちゃんと出なさいと言っていたのね。特にヒューマンティーズね。特に人文は絶対に出たほうがいいと言っていたんですよ。

僕は、メッセージというのはわからないけれども、さっきも申し上げた通り、大学というのは必ずしもアダプトするためではなくて、考える、創造力というか、さっきラディカルと言ったけれども、何かとんでもない創造力を持ってもいいんだよ、と。1回高橋さんと一緒に授業をやったでしょう。

高橋 やりましたね。

勝俣 大学のどこがいいか。高橋さんは昔アルバイトをしながら、土方をやりながら楽しく生きた、と。僕もやはり大学に入って一番嬉しかったのは自由だということね。この新鮮な味というのがい

つもカトリック系の小、中、高で、何と言うんですかね、非常にある意味でともすると見かけのみを大切にする偽善的な道德観の下で、やっている本人も全然信じていないような、そういう中から、自分はこれから自由なんだという、白黒から天然色の世界に入ったみたいに、国際はそれをすごく生かしてくれたと思うのね。

武者小路 なるほど。

勝俣 いま、これからメッセージを残せと言ったら、一言で言えば僕は「戦争をするな」ですよ。それは卒業式の時にも言ったし、「学長室から」か「白金通信」で、明学の戦前に卒業なさった方が中国戦線で戦争が終わったあとに亡くなっちゃったんですね。その時、数行書けと言うから、「教養とは人を殺さないことだ。戦争をしないことだ」と。

僕は初め、教養というのをばかにしていたんですよ。教養という発想とはもっと違った硬質の社会変革があると思ったけれども、僕は、国際に来たおかげかもしれないけれども、特にいまの社会、経済、政治的な状況の中では、やはり国際の中で考える人間で、人を殺すなという、これが教養なんだというふうに僕は言いたい。

加藤 なるほどね。

勝俣 そのボキャブラリーを、国際の学生がいろいろな先生方の授業の中からあくなき好奇心で吸い取ってやる。専門教育というのは、そのあと自分たちが考えて、僕のゼミ生も、ゼミの中に一応確信犯がいて——そんなこと期待していませんよ、僕の推薦状が役立つとか、そうじゃないですよ。自分が考えたいから来るという人、広い意味で明学の国際も、そういうような人が受験で来るようなシステムにすればいいと思うんですね。でも教員自身がコミットメントがなかったら、これもいわゆるマネージメントの世界で、そうなったら非常に残念だと思いますね。このままいったら、いわゆる横並び。語学の配分にしても、僕は、すごくおかしいというか、一番大事な人生の 19 歳、20 歳の前後というのは語学だけじゃないだろう、と。むしろ高校とか、そういうところのフォーマット化された生き方のトラウマから自由に考えると

いう、その入口を教えるのが僕は国際の使命だと思っています。

高橋 ありがとうございます。じゃ原さん、最後に。

原 放送大学に移って、新鮮な発見がありました。何が新鮮かという、私はいま院生も若干探っていますが、その中には自分より年上の人もいます。いままでは 18 から 22 しかいないというのが当たり前でしたが、これからはそういう大学というのが少なくなっていくんじゃないか。むしろ、平均寿命がこれだけ延びて、リタイアしたあとの時間がある人なんていうのがどんどんこれから増えていくなれば、放送大学は将来の大学の姿をまさに先取りしているように見えたのです。特に明学の国際の場合は都心に敢えてキャンパスを置いていないわけでしょう。ああいう住宅地に囲まれたところにあるというのは、ある意味では有利なんです。というのは、地域住民が来やすいところに位置しているということでもあるわけだからね。だから、公開セミナーをやるとものすごく地域住民がやって来るわけじゃないですか。その地域住民の圧倒的多数は高齢者なんです。年配の人たちなんです。ああいう人たちを、より誘い込む教育をこれから国際は目指すべきであって、そういうふうにも考えればもっと大きな潜在的な可能性というものを秘めているんじゃないかと思うんです。でもそういうことを真剣に考えている人があまりにも少ないですね。国際の中で。

高橋 ほんとにね。

原 さっき言ったような従来通りの入試をただ繰り返していればいいみたいな、それでずっと安泰みたいな空気を感じたんですけれども、それでいいんですか？ と思うんですよ。せっかくだと言ったような、ああいう環境があって、公開セミナーでこれだけ実績を重ねてきたのだから、それなりに知れわたっていると思うんです。だったら、もっとそういう人たちを積極的に誘い込むようなカリキュラムを考えるべきだし、教授会で言ったのは、日文研(国際日本文化研究センター)のケースです。日文研というのはほとんどない丘の上にあるんだけど周りが住宅地なんです。あそ

こがやっているのは、逆に周りの近くの小学校とかに出張に行くんですね。先生が。それで小学生に対して、工夫をこらした面白い授業をやっているんですよ。横浜キャンパスだって周りに、上倉田小とか、いろいろあるじゃないですか、小学校が。そういうところに、たとえば先生が出張して講義をして面白い授業をやるということで評判になれば、一番近くにいる人たちがやがて中学生となり高校生となった時に受験してくるじゃないですか。一番近いところに。

勝俣 地域循環だ。

原 そうそう。そうすれば、非常にこれはいい関係、地域との関係というものがすごくいいものに発展していくんじゃないかと思うんですよ。

加藤 いまはどうかわからないけれども、僕が 80 年前後にケベックのフランス系の大学にいた時に、東アジア研究というマイナーな分野だったせいかわからないけれども、学生で 18 歳から 22 歳という人は 30% くらいだった。あとは全部それ以外。

高橋 それでいいと思うんですね。

加藤 そのほうがずっと面白い。

原 すごい熱心なんですよ。だから、本当に指導もしやすいし。必ずしも基礎知識があるわけではないけれども、非常に教え甲斐があるというか、そういう関係性というのをこれからもっとつくっていくべきだと思うんですよ。何かすごく危機意識がないですよ。

高橋 そうね。それでやるのは受験生が減っていくからどうするかという、そこしか見ていない。

勝俣 僕は知的な意味でのこのままいったら世界はどこにいつてしまうのかという危機意識を持つべきだと思うの。それが違うんですよ。いま言ったマーケティングが必要で、学生というお客様をどうやって増やすかでしょう。

高橋 そうそう。

勝俣 どんどん 8 号館がきれいになっちゃって。心配ですね、あれは。

原 あの茶室は何とかしてもらいたい。

高橋 (笑) みなさん、今日はどうもありがとうございました。